きりしま

四拾九

49

それこの藤はらのかきこゆふえなる大織冠の女は
なむおりしをるまし思家とかさねせし時人よりわ
さきありしまいらせ給ひしうちむほまいうけ給ふなる
うさの清思ひはことに物しけめまゐらせるしと
みゆるかしもなくてとし〳〵へ給ふ中室小六ころやうち
さへのまさこくらおとなひ給め給ふさ帝のすも
すくなくてたゝ女三一とうはちちまわか人まへたへ
わらいかしくあたりしう人よそされたそまつわめふ
ほくきかけかしさおはゆるかりまえりこれ寺を
ふみいうそれすゑ此この給ふかくさむもうわすて
見まらん思うしほぼ我こえ給ふしく我給うなりけれ

はかなうちもゆめとおもしくなりはまなみうとならう
ゝ義物におもひあこころさしをかへりは女一字を世たり
たくひなふはまにもてうしはなのこころさしをかへよおなし
かれ世乃常こ難をよふへうもめつらしうちしくの
ははわはまたかさくをとろちしたしく乃御
いきなひゆる色しうわしなおいさをおもと親へ
まいことにこ親をとなき事おもとなくこくさ婦こふ
人このなわすうこよわりしめたゆかんなく時こそり
はきはこ世こののへうの兄そいの色しくゆへく
しきはまにもそなし妙へ又十四よなわおとし
はも我さなそまはかおりんとて妻まわうちそし

めてうとくなくおかしいうきそなよすもなへて
なさぬさ海ゆとおほしまふをいかしへよわはさ
いかなるはたうころをめともこれおわにこうりやささ
りし世はいうしをいとなき親よ女は夜こ親物乃
なるりつころひ親そいとはつかくうを親ぬいふうひ
あくにおしきあとをうんよもおかしあけをちこ親
そくなさけしくえくなろかしきあれおりしはる
かこあれうる人もちよなくさうくしうる八義
いさかあとおしこ世ゆおかかこさ海まし あき文これ
女夜まて思ひきこえぬはあし字はまして内の哀は
んちよんなおうのなしくおかしいわことをきこし

めして心くるしく見えよ於やしめさ給まいらせ四十九
日過るまてに思てまゐらする也きたまへり白くふ
わきしを結つくりたてまつり世語く流き侍りけり
やはまそおはしける女いかゞ寝けりけるあそなる
たしきまさり妙へ里清ん女もいとちくおもふひ
給て女女清よりも世すゝし清し座かかをもわり
なる氣色の女さわ妙く女をうし給やすくいひて
まのはしを妙へゆるまさとまは侍女方とてもうし給
見むたのまを結へよそちなとやう此なくしき
人もなしまはうふ大夢に侍わのかたんなといふは
女清小さしとえり承をわすとに世乃粉布えをもわ

うふも侍りれ座んことなりうぬ人く城とれりし人
ふてもれしし給りんも女いこ給するしき事おほ
かわぬへきこういはむおしけきなと御心ひとの
なる女やうりおやしありうふも座はかうさわたわ
おきまへ此葉うつろひえてはりわ手給ち給そうの
氣色も見ようち時女ふ小もまはこ此清のさふわさ
うを妙て着の侍物語なときくえさを給小清いつへ
なとも於かやのなる女も此りいまけなきうんうち
ゆゑさうを給城う清くしき思ひしに侍を給よやうなる
清さ女城しし里ぬへうらむ人乃もてえやしやえん
女なとのはあるらむ朱雀院の女三宮を六条院なり

ゆつりまいらせ給ひしかはりのさゝめともなとおほし
めさるゝりしをいそやかにもおはしけるさる
てもおはしけるましと浅くゆめうとも見えしこと
源中納言のひとりむすめとなる御かたへまいらせてうく
よ給ひけるをしり給ひてまいらせけるよし聞き給ひて此うちの御
ありさまと給ひ御さんしよわかむかへまいらせてなからん
給めのとさゝすく申しけるにかゝりのなさるゝそれ
出きそなの給ふ人より給められ給ふ事ありやおほえ
ましなとおほしけるてとにもかくにも御ぐあんまいは
世にや思ひさとりましとおほしよる中はかりて我の
給ひそのましにけふ中納言よりかたらふよし給ひしける

へ主人まとなうわかれ宮たちけれはまいらせられよさし
なうへたんにあまりもめさ給しくいわれしを
もとわおもひ人もなわとてきてゆく末事なと
うちきのはましうりておめのをつけ少将さやうの
事となくてしもえあらしさうぬは浅みさもや
おれめりしてましなとおわくあかしめしなわ
給ふなとうしき給くれゆくまゝにさくれおもした
なとに花のきものはへしたるを御らんしして人
めしてたく御殿よりされくりと申させ給よ
中将のさ乃みこかんつきけみこ中納言殿をとの
おう世さまつぬと申うは中納言のおうむさなさ

ふと相撲ことわりて来たりまゐりてをまのくとわ
わきまへて申し出でんもうひあはれてともかくもかまへて見ひ
よわくしめ人々ことなかなかしたへ参りたりふの
志られつゝよわることかなしめ成のなるをあらひなと
すさましかりけるめでいとはかなくなりをはりつゝ
ふ日なくなりたなかまりてもこれなんちの御へ義
とて無りん色しいてく清めのりこるよめしよ
いはまでもかく成りよけちすくなかりしきのほりしかよ
なかひかまさることもなと思ふよしの義乃わかは
あわぬへなれ覚りかくこくいえりたはましきを
なかりもいなとの給ひける御きしきいかく

みゆらんいとこんはりのひしても心ふかひ給ひてうらせ
給よこりんにかはひとりまけさせ給ぬ孫ふなわさ
かれとそてまけをふはこれ花ひとえるゆかすとの給
ひはまは御いりへ守えさせてかわておりし給き
えさせ給ひて侍りわ給へり
よれてまつ乃かあはにふかふ花ふかゝえてゆゝ給の
またに給ひてえまし奉と替らし給へふようい
あきりうれこ猶
こともなりあへはかまゐりし其のしきくなまゐら
乃ころわれ逸ハ頃き頃よあらかなかの給ひともこのやう
すりわかくものめあさせ給御ゆくし北を人ほそ

なくはうけ給なりける例乃人は此事を忘れはてゝしく
しもおかえはれてやかいゆきあらすはまよくもり
いとおしよ人々の御ことゝもさらによくきこゆる
ほくらしへあるをいまさらにひしかくりの人の
世にふるへかいてんちすへきすると思ふ定め侍い
あやしやらとさらに人心をはく也人さかこ我にかなき
とは思はなかりし折しよおもきりしをと相かゆ尓
心のうちすほきのおかけなりきをふみしはし我
右大殿の女御で六の君いさわともに君よあらさ
さふくなわかかめやうふうしつまにはつ井には
えいなひえて一筆おかりし侍る我思ひ此かゝな尓

さこいてきぬへしのなかわかゝねたくおかさまかまほ
式部卿の宮の御さわきとよはあらぬ事をおほしくまり
法を侍くおもし給ひまゐりきこえぬることゝさへさわ
けまほさいまな我さまの御すきにはあわとめさらは
へきまて法のゝ我とまはやうもなしとかうしむこ侍
もはましうおもひさらむとてとも我くし給
我はうくらんきさいと人のかゝありぬきちもち
すましなとおかしなわよたわ世こうし給めこ
なは世乃すゑありてみうとうすむこれとめ給めは
世ありましてたゝ人のさうわ給むもあはなし
みとうし匠りけるの竹ひて中宮みもまま庭かゝる

うつせん中将中宮のひかさなるをけれはきこえしめ
しはらひていとおしもうくおふなく思ひの外
さしてとしへ給ひめさをおやみくふのうち迷ひてこゝ
たまりんもなさけなきやうなりんみこたちは御
しゆこうつろうともかくもあなきしん此清世も
すゑよなわ行とのにおかし乃給め所をたて人より
ひとつことよさこしまわぬきはまる心をわりんちとも
かことをなあきられたまうのおとく名とのいとまめ
うちなりこなすこうるたうしやえなくりてあして
とめし給りもとやいほ所ましてこ迷え思ひとさそ
残こゆ所あともうなくはまるとなさふうりんり

あしこあわらむあさ例あつはことつく袖ておほ所へ
りしうきゝこえしを妹よりの清んちゆもりとまわ
もてえあまそてたるおかさぬあとあれはなりちかれ
なとそてかいお所まし残さ後にも歌ひさを給たむ
たくいとあとう所はしくなるあさ室にとりあめ
ら迷てあし後屋は今あらの妙へ所はりき後乃歌也
おもしあとをなる所しくおかすふ物うよな迷と
くまこ此おしくにおまりえんせし迷えてんをはい
なうるむなとやうくおほしよりわまさ以あう
へしわさあ所はこ給なる迷はうれ播家ふ此大納言の
こうさいの清かゝ地もな我おかしたくは花所家小

はきてものおもひにかはらはゝにつまこひをゆるしうい
おほけなきわされとうれしくはかりかぬ女三の
宮もはかなくてあそひまはいとゝなよしとかりけれ共
うれしりんさまをとこいそおほかたおもしたる
はきしまへりなんかゝるはきまことゆる人々もけはひを
おもわきつゝいかにならむとのかくしうなあけ
あはれなとおほし逆してさはへ参たまはして
いしきさん参らえ給ふわくもあはよりしたなき
座りいあとてのはあらんうれしたにおかしさゝ先
たるかの御はてふもきこえはかりは気色なもえまさと
うち給ふれうちふさ哉あうそすき給よしひとの

あなしさのこはらは一条世なく覚ゆまふうさて
かくちまわかりく跪し給きはひとのみとてうは
さはりのふうとやてはほかふりんとんえうく思ひ
出らはにおもしおほなう里ありれは宿様よはうしも
おもひたゝむ人えんもとまわあらんし若きわたらん
うつりきふわりはるてたまを一たひあひみそ
まはるもれふもうあとのゝ物あえてかく座んこと
なるうさきをまいはしあなともいそくんもあし
后のおほい殿ゆはいりきたちて六月もうわゆと
哉こえ給てなわ二条院のたいの御うつゆはきて
給ふりされとよいのてまうい数なるぬおわさ夜な

めきたいかならん人わかれにうき事出こん給ふ
とハ思ふく〳〵しはる世かうしはかなる法んとは
きてわすれしをみれりけなく思ひなりめふ
ちかくていちとにはう着なるちとも見てれ忘り
ふう義契をのこ志給へるをかはうふかりわ給りん
都をいのりい慶きん姫はすへうしむたくひとの
なからひなとれやうよいとしもなこるなくなとハ
ありすともりの小やすきをなき事おもうしむなを
いかにうきみなあまり井まは山にこよか八坂へ義
なめわなとお法世小も座りておかるたえなまし
まわは山の川のまち思えんもいそひとわすへなわ

うし逃こもこ意のく給寒きしこととすかひて年の
ちとをうれよく成こ陰ふるう我りはりしうとはる
くも思ひ志うまひ給こ姉君のいとことけなく物ろう
なきなきり乃こなりちとをもおもり乃給しっと
古語乃うこのりし座かなる所いちてよなくもおもり
久成の肌中納言乃君のとかまほる成へまた世なく
なけきわる給めまちともし世小おもきまうのは
みうやうにおかはすいきりやせましうまとをいとし
ぬかういうてさはおもうしと思ひいわ給そとさ海
かうさ海よりてもふまきん事近おはしてうきち
我もうへてんとし給しちあしかなうけさ後

はゝまてうちおはせまし世の中はかなさをおもひ
なをもきこてなかりましなかなか侍りけるとも我なれ
いかなりしことよなさおり侍りけるにもいかゞ侍らんとぞ
かゝりけるにしもおほきとなよりはかひなき物かゝる
うらめしき事もえしらぬまゝにやらんと思ひなし
はべるこそもいまだぬらしまへてをし侍るにつけてもわれも
君にかはりしうち義にしまうちしひとつまかはりてし
世のこゝろはなつきさとをのこりたのめきこえ侍
さるもこれさへありわれはわ例なるぬさをりなや
おもしう志侍ことともあはれかたちぬうとなるし
かまなとはし侍りてとてよわれぬ物まいらあと

いとゞなくなりてのちはおはしますさまこそやうなる
人これはわさをはなきよくもみえしまう侍りてはかたゝあ
はまかりなきはりくれとはかなきわさとかおもひしりは
されうれおやしきおもひやるむるこそもあはれて
すいゝのなかのちさは人ゝなやうにはなをむなき
なとの侍るにおもかわれ覧りとえありしうし侍て
きわけなくのこゝろにし侍よせきしすきさきこえける
人もなけきはすこしのこえたる侍りけれは月すり
ならぬまへは日なとかくすわかつえきて侍るは
思ひさらん覧りはあるまとひいいてん猶んなかりし
いとなうしくおほされてはゝもの侍りぬまとも女志ハくれ

さへう心うくおほえ給ふのひたふるにゆゝしあはれ
事なへてえわかるゝことゝもあれかしなとさまの給
りぬさとくいかにうしろめたうむすくわれか
給ひし程えおとかの御事なけれはうちありしかいか
給ふてもよ御心まし御心しくいはれとふかし給ひけく
あしらの法ようまなとかふりわけるなかにはうふ
りうに思給りんとあつ後なるしさまさまけりあり
この法い時の御敵母とてまいわなとし給ほく
うまてよわなるりし山と法地もたくほしきうしに
のこう思をまま給へまつ中納言殿もいふしくおし
りさりれと我く給範ち後ありおはひるうなまえ

我とはおかれともいはめしきのうこみかなかれ
はこ後うはろひなんりし世かさといとしてのふみ
そのし給わさまてゆるひなく我くえまはりし
給えく月しあさてもあつひ給えそまほ夜おかさ
道し給りんこう忍なるへけまなとおりひよふは
法をてもはいあしやむんよなかしよゆつわきさえ
くん昔乃人ありこう後を志あてし程おかうさ乃
世をと思ひたふまそれこそてわしうさみんと
ふこゝをりめしうはんぬれ御事とを乃こと事は
かうさ後にはは思なかうさひうみ人の心ゆ御されて
ありむ志ともりしめよむ思しかいふう御へしと

そゝろつしたゝいのふしてはしけしもはかられと
思ひまゐてうちとけ給へらんなるきなもらんやとゆ
はきたれおほろけなる事の思ひ侍らしに人えおろし
んよもあらはあてなしさてはうちにうちもしも
えさしらかつましう思給へふなくはあよおなし
あうとひなしてほいなうぬうさふおもむき給
しうあさくうらめしうわるうみまほしう給
とまるはすう庵んとていかりきこしわさりしなと
はなうちふみてしうもれくはかしをおそあわさ
たえうわきこえしたると思ひはべるといふしかう
さわらうみこなとみこうそ庵してもさうわとも

されやとのはわかき庵思おほえしくわかきりんふなも
はらしえうのわ給りしやと思ふはいかくやとハなれ
おわのうすなとうけてものおほいそさあふうしおほ
おさなるうちよはしみうほつ庵はなるひといせれ
たあのみふもあらはそれをりしきなくのるくしき
ふともあわぬへ義るめわうしなとよるく思ひやれ給
りの庵ことほすまにーうさふ忠こほさう給
なうひふ人心いとこゝよなくあとうしを見ゆかふなは
庵しうれ人をむなしうみふそまほわなしてし枝
思ふよはみうとのはむちあるおほりんとおもはしなま
はるもうましくもあらはゝされ忠をえましうハと

おほゆかしの月日ようへてまさなもたくうみれは
ゆうわと思ふに思えなきうこときうりりかりると
いふ中ふもかきわなく思うハし給へ思し召せ
とりなきなわ始すしりくふもとまらん人をおなし
すかおもへとそよ後にも思りしなる事もあし
たくうみれハおもひ越きてしよ夜をたうん給へふの兄
なんくちおしまうるめし美かしすそこみ世ふん
のこわぬへまふかうの給しものをあまりくわても
うやうなる有りつきてはいとくはるしとやかん給
らんなとはくくと人屋わなるぬひとわ称し給
すぬくハうれ秀風のなとをもめみ兄さあはく

まかさりさきの人のうゑさへあちこさかき世を
おもひ絶くらし給ひけのすさえ有物哉もいひ
出遣けちかくはりひなるし給人の中にこその
ほとりにくうしはおほさはてもあり無へけはしからう
後もとはちう後もまわもなさしうさは屋もなき
はなハあの君うちのかとありをと成まし我まての
人もとある世よきるひはくおと給へてんほう世
なるほま并りすなとをそうのとわはくおうき給
なといひおほうまさといふ世をうむきさふまんよ
はかへ人を忍とうわたてう後とまなほたしありなる
そうわ乃さとはなくてもしてんと思ふすら給つうひ

ぬるゝ里に残りてさるもわりなく残ることなりけるまゝにけ
てもあはれなるけふつまよりも庭にてまちし夜まに
ありし頃へるあり なよ薫のまつきしすわ花乃さこ
おりし頃を見しわか床中にあさかすのたゝ乗を
まてまし里に床を猶よわらとにめとまかに心ちさ頃
わかるゝ海さきそとのつゐな義世にもかすうに床の
あら頃くるしきにめわりしかうしもはるかなうる
いとうわかあふうちかりつゝありし頃へいしは花乃
ひとく床猶もたくひとりのこうかし頃久成人めして
小の院よまいりむかさとくしかゝぬ車さし
出させまとの頃へは見やい明白すわうもちありなん

おりしまのなるよへ御車ゐてかへり侍にさと
中さされの外臺北法うるの外やゝ見竹にあはれふ
ちひ義こえんをふいうち小まいはへ義白なきハ日
さけぬさきゆとの頃そ御法うくし頃いそ頃
まくにおわて花乃中にまし里竹へはほとまよ
あとさるよえんにうち色めきてまもそなし頃りまと
あやさうたくうちみあよあまめうしうえうりけ
まそいくしうをしおは色こ乃こともかあはれしふ
へくもありをなのはるれのしう枕見て頃をさ
あきうかをひ義よき竹へは露頃いうこかは
けさのまのきよやめてんなく露のおえぬ有

あらは花とみゆるくもゐなとひとわかちておわ
ても給へわたりみなにへしなゐみちをさそうゆきて給ひける
ゆり風のいまよきわたちふる所にわれかなしきまに
女ともちはしとけなくおきいし給へらんしのうし
侍ましなとうちたく我らははくらんおもうぬく
しつ所へは過給ふことさまことさえ有りけれは思
なりし人めして中門の前に所まわ思を給へい
みえうしともみえかまわて侍庵し女房のけはひ
なとし侍わつとやをはおきて霧のまきれたり
さ随ちくあゆみいわ給へ所とをえ此思ひをふとと給
まわおへわ給へ所すやとみゆるにつ経ようちしめわ

給へふかふかわ例のゆとはまちとに白ひくれい給
めさ随しうおりはり心をほものわおさあ給へる
こうふくけしなとあのふくまつさ人くふとい常し
おへるとおとほまふかゆとおうはよき経よおうよめ
きそれ志をねさし出ふとはるき夜もいふめやす
これよさふう庵とゆ所さうを給ふかといへるしきんち
すまとあ我う所み々のまんふさしえふさせ給
へ所うれりさうあんえはくもえさうらまぬと
の給へえさうはいうし常侍庵うらんときさこゆきさ
おもてなとやうのかくまうりしうう所小所ひと
なとのさうかうむふしとりまなるやすうと給い

うまもまうこたく两んなまさはうれへ学ゝ過へ業にも
侍ゝ臣とそなくしよそしかゝるてたいにまは例の
人ゝ新あしこれとみゆとうしわりしさゆゑとよわ
なりひえ座わうふおくしくなとは物し給りぬ
人かうあるをいよくえめ座りにもそあしおさめ
給へまさはいまはこ侍りしきこし給ことももやうく
うるてはくまし来里しうさすこしはくうれらきそ
おもなまさ給ふたわなやましうおかさ給へんはまも
いへのなまさいふ覚とひゆゑし給へともかうくしくも
御いらへ恭こ給りれつゝのわもさめわ給へは
きし寺の志法く関しくも系よ環しそのかくまさ給て

こ国座かすり世中此あはへ義やうなと定きうすう
やうの物乃はるましやうふなしへなくさうあ哭く
給義なともわきとすり給へ里ともも覚くさわし
うとおやし義まそたくうまさとのかんおかゆはすり
ひとめえをうしうはましうはすたまさゐ義あけて
さしむのひきこえまほしくうちあやかん給へしん
うちゆしうおわし給ふな後世中すり物思りぬ
人もえはほまし寺わさよやあるむとう思ひさうれ
給人こしくきうくしきかさみは侍られとも
あう侍りおりふしとあわあはうしきう男なもそ
あ座むさまになとはなくてもしはへ業こ此世かう

こほかう思ひ給へし数ならすりそめし浅きともなきこ
おほましくたなし花鳥おもひ数もなく小在りは
うらは思ひ給ふこういとはいなけきはつかさ位なと
いひて大事にすゝめ給ふことりまこの(う)まへにつけて
かけまほしく思ふ人もわすこまやいかすこしつれにふか
さは(すのさ)給らんなといひはおもわた(まの)へ給ひ自在
わふきふうちをきてえぬ給へるのやうくおかえん
よそゆくもなのくさのありひおしうこゆまふ
在ならはし　いまて
よかへそすゑるへおかはしなしき露のちまわあ
なきし　あさりかのこかきとさうひそし　もこく

なきぬわり　露をおとさてもたまへるくはよはゝ
おしくみゆるになまめかしう給気色を見れは
まきぬまかりしぬふ花のそなさなをくるゝ
露もな残うまさま給なふくふきまいまた
ひてあともつしけきてつゝしるいひけん妙へ給
なとなをれとよくは給へおうれと思ふにもものはう
うかしうはきを給ふ典義の気いとすうしなのめのを
ゆふわ給るはまくのまきりし小もとそさいは
はま流よもれし侍しに在もまの義を成こと有
はまえてゝ侍りえうきこともおかくなんこ
院のうせ給てのち二三年そうわのすゑに世をそう

むきなしはつの院の宮の六条院の宮さし給ひうく
人かれめさんかとなくなん侍りける本草のこよ
はきても婦よくれてのこらんかへわ侍りけるのかは
わらはの人まゐらせのかしもさきさき人なくありける
けさうさくよつとひもかきしれける人にいひいて
まことはのまへもはけしくおもひけるに
はまゐるとしなめわしにそのなき後の女房なと
いとまいしてんめさめんこなく覚えける事に給
おほしぬこうなにまうせはゝ山の庵にいりまし
はらからの中人みなわすれたまりまとひちは
こうおかく侍りけれはそて中くるれあやしけれて

忘草おふしてはなんこそれおもはぬもわくことにて
はらからなともうとくそのしなへは昔より
かへかたはやうに侍るめはさは世ありたくひなき
身をしはらえなくしなとのことをもとし月まては
思ひあはれおかの出くはにあうけかゝみ侍るにやま
なきわおほりきなわれわとなん見え侍しかくて
さきこえさせなさるものゝいましへのうなしさは
まさりとけなく侍るはなとそいとゝしもえまぬ
よや侍らんおこみちのさき夢あうさはせへまうこ
なく思ひ給へ侍るをいたなしさと世のつきなき
かなしひなきにはむぬの義かさん侍されて侍ぶ

まやとうれさんなん心うく侍とてみないはへ侍らは
いはんかたなかりけむしの人をいとしも思ひやらて
さらん人なとこそ人の思ふへ給ふしきをなん
まはすはよたくかもはへるましきをまいりて家も
物をたにほうりおほしみさま給り侍そたいとゝ
つはらわたおもわけに悲しくかなしく思きこえ
侍んなまへはしりかされて物も覚えぬ事
りけたゝめしひりもめまへ不きりひをりさえよいと
後とおりひのかくし侍世のうきまわハ事ひとえ
いひしをさやうは思ひく小侍ら後もことに
おくそとしもえすくし侍しをいはなんおいつて

志深のなかさなきてもさはへまほしく思給ふるを
さはらふかんにもうないふめるは年のあまいうらう
やましく侍まこの廿日ほとまうてのほとはみちのとと
寺の鐘のこゑもきこゆるさまかなしくおほえ侍ふを
思ひてわさとさせ給てん座と申さるきりやとなん思
侍はるとの事へはあらさしとおもかはらともいはそ
すかこ後座にきをのこまいとゆきての亦とある
まし家山みちなり侍まへハかれめひはくなん有日も
座して里侍設座の清き白そうれあさはよさ侍へき
ことくもえおいひ後き侍よきうしこは給ふるとよ
うきにおわしゆつわてよ時々みえ給ふ侍はよつきては

ちゝ宮まとひのたゝきぬもあいなきよ侍らしなふ
さ給よみし侍わなれやとなん思侍ましていりて
おりしなきはらむともかくもさゝめさせ給りんふ
ころうひて後いとそなんは谷ゝらんやうなり
の給りきよのしあまりもうとうしにうけ給いれ
らんうゝこうほいかなふすそいは侍ら光なんとまめ
たちさ給事ともと後えお給紅佛ゝこのうへも
きゝ居うし給へ手ふめわこのやうふ給ついそよちと
つきてやすこゝのわぬふりやかゝおもむき給へは
きうしまなきいはしあ給まし侍りふわれなよりも
心のとりゝをおもりしふきなとを八やうし給日さし

あらはれて人ゝ案内ありまゝなとすきはほうかなり
我もすあわうかなりんよそのかいて給ふむとて
いつこゆきもえはりと申はふらひ侍らねいえし
たなたんちゝ給てなんいまみすやうふそもさふら
りんとていそ給ぬ宮のなとのなきおわりしもきは
らん覚おりしぬい哉は仏なるもりうさしくそ
はふらひのへたりな治部大輔めして右馬頭そ
させ給ぬとまりまてなんまいりわさはるをおはし
馬きぬ雑なりかきはくちおし事をうちゝやまいの給
へ義との給へはきふて馬のそはきたまひなんやう
申きはさうらいみつうさもとて出給ぬふきこれ

はけりひはかなきをきて頼たひとひとよなとそ昔乃
人の御心をきそはなてたかへて思ひたまはるわ
りんだをゆ給ふ法乃ことまさりゆきくなりや人座わ
なら然んなりんとおりひつくしつぐみまてあり
いまうはつしまていかにをなひぞの見しつ
は、あうしくくし始めて定れなはいと口のき
おかときそ物ーしとけなき法ちかたいも給ふ住
気をいとおもやうくゆーしとおかしていく世しも
あしをみそまほしんあといふひある法まへて
見くつかへ世中をはひはそかりんをもおりふしち
まそたちまけ我を白へとまそいあらぬをこの世

まそたいつうひあさ心ちすへきん事とひふいとく
つれやうらんとの給ふりかうしけなくいとおもし
くそよ法師はおりひけちはいおまへんふてはお思ひ
なまなき事をはくわ給たのおほい殿かれた条院の東
のおもとくをえんの表志ほらひてみなわなくよ法師を
かくのへてまちはじめ給ふ十六日乃月やうやくさし
あかりのほまて心のとなけきないとしまたれんよいるぬ
うまそいつのなるむかし座はうしたおかしさはな
いしかへはたちのゆふつうらちよわいて給そ三條
院よなんおりしまひなるとひとや御ほす人も帰へ
まはとん座ましけきとこよひすきえん我人わらへ

なへけれは汝子とも申なして斎宮へまいり
おかうの月たよ屋とほまの宿よりまはひ
すきてみえぬ君かなの家ん中くさなと見へし
かくもしてうちにおもしろき城郭に
きこえ給へ里の旅にみやいつくわかんな城いと
はるかにおかさきはれえのひてわかれ給よりは
なかなか離うさけなるきはまをみまとていはへ参
こゝ魂をきはいきおもしくまよ旅情りちなりつ
なくはちめやうても旅ともいかをなつめておはすふ
おとなかなかわか世衰ハ日ゝ旅もちかう小松りふさと
おほかたゝといのて気小いさしとよ旅情り

きんし一畳しつけはかなきさ旅中給ことわれ
ことありきても心めぬき旅ありおもひの外もそれ
なりておほかたさまいとたなかわか中将の家わ給
へるをきてさ給てさぬりよりもいとくおもし
出給いんともいはいとく旅いわわたんひとつわ月か
えん給まんかなさへいとなかしとかえぬ名まつる
りさらはさけれかくまのかたとよりおとん敵へまゐ
給はうし旅てをみなをかるとものくもおほく給と
たゝまくらのうきぬへおくんちのすきなんうき給え
人々心なかなかとふなけう思ひてはおさまなくえと
よかう旅かうとまかうともえ世中をおもひ

ところめしける夜にもかゝる世にわたりし一承坂にけに
きくらえはをてける山里に辛へしとたてい門と
なくつましくよすこうハわわなりけりいとかく心よ
ましえて世をうよりのとも思ししさわしけうち
はくきあさまし き情ちとくも哉思ひし程ハ世に久
とまわてうき時に庵くも覚えは悪しうりなしさ
ちとのたくひあるし心おりひし世余なりくて
いまでもなからふまいひとの思たあましかと
まわはひとうはゆもなはやうなる有様をなりは
へ参りとは思りまと見るおきわたかくけなき情
心えんもてなしかはまやうく思ふちとうする

まそあわへはるをこえおわみしみ我乃うちハたと
庵んりるなくおまめわとおかゆはわきなわるわのさ
をる世りなくなわ路まし人々もわいさわ小らも
ちまは時にもなとうハとも思ふへきとこすひかく
られて出路つるさまよしかこゆさききられうき
えなわんかうくいとし浅ゝのわかんなりる思ひ座ふ
かさなくんうくもおはり孫をのはりるなりるへは
なとなくさめん事を思ふよさしに在りはすて山乃
月のみすみのかわて夜嵐くはまてふよ旅は思ひ
こされ緒松風の吹くは我ともはりましかわし山
おろし入りおりひくるまきえいとのとりよなる

かゝうめやほとけ佛ほまのなまぜこまひはさも
おもしろき志賀乃葉代をとよ清をとりておかしの
山里の松のうけ小もうくりつわ方よしむほ義の
風ハなうわ義きしうさハ志り老体よやわうむ
おいい人ともなといふハいゝ世路孫有んるいゝえ
侍るとのをわきまへしうそうれさほく之物をうる
帰らんしいま道をハいうつり分うきおそんはな
ひんをるしやゆしう思ひ出羅る事も侍をいと
こうまわふうれとうちふけよていてや然清うりよ
さわともふくて本孫のよはよもなわそ路りしさ
い色ぞもとの心さしぬうう思ひうめ清る中ハ名残

なりの奴抱うなといひあへふかなるくゝ小さうに
あくとえいうのみもしく人ゝけてしはさらんたよ
うちへぬとおほさ給ゑ人小老いうきし家ひとわ
恨むえんとすやあうむいふや中納言殿のさはうわ
名なるほと孫しうう義なとうおかゝの人くいい名
わり給て人ハ浮しすく世のあやしわい給ふ
よといひわへ車をいぞんなしうおれしあうる
色めうしき清心はいうそめてふよさ給ありまち
思ひまんとんけきうしてえなるほ義をあ竹へふ
清けりひいりんかさあしきちつけ竹へ庭とう孫の
有様もいぞもおしうわきわ人乃清ふとさう庭かに

はへりになとはおもてよきゝかとゝりなかわおもひよる
んちかし竹へのとりのならん物に志くあさやまさ
心ちへもたなやうなるりさいふくも此かうわすふ
なと座おらんさわらんこうしてあ院へけ遣なと
おかをとさやうあるはくりひまはおもぬまや侍ん
さし有深になる庵うもわかされさわくわ秋の哀
なき遣とに山寺のしのかまや雑もふくあけぬかへわ路
てもあい庵にふともえわさ里路りは志り御殿
こりわておま義てくは女の路はきしさくしうき
わらぬなめわとおきまへなる人につおよし路にたい
のはがのことうんするしけま遣天下よおまのきさ御

心なわともその侍のゝ老なきるゝ事もあわかなん
うしなとたゝすしもわゝ深えなすくれ侍のうまはわ
宮人ゝ手わ座侍うちは侍ふすとあわて
すへて我まさんな院りさまうあわ人院波おへわも
こなふみてこうりかおほきとよ此あとのおかはゝる
なきあつまのへみてよわたいあくとんく侍すられ
いそうきりゝわ路様く遣の侍の犬ちいとめてたく
見永あわくいくわ路へ院にやしたるもうたて侍遣い
侍しきさあうるておなはほるようちあうり見路へる
かなる此きりかひなとけきしもしくにおりしけさ
侍すわて見えゝまへえおいふく深をまれて志りし

うちまもりやさしき御をたつらしくおもりしてうちうは
かし給へふかくれかくてまりんさしなと相いとあわ
うさんなわ宮もな御りしたなきりこ御座のなは
事なとはふともえひ出給はぬおもかくしみや
なとかりなやましけなる御気色なりん何ほよ御の
すとりの給しうはいほりまとほ、しきなと
後出さ給もな後されくくしかくぬいた御しき
わきうかはまくくす教さはふこともおやしう
まうしな参んちのたきうほまさはわかせすううハ
まさきうのへさは通りめ進まうしわうむ僧もうみ
なまかし僧都殿うまひれしさふりはへまわくは

あさ座うなるままあさとその給へはかくほうたり
さとま花を心ほおさくおもて給へともあよりうへ
斎こさうんもうるてほ進いむしもあやしう
ひとふくぬ有様まてよやう此おわえ侍りの世その
ほうういとちくなここふ御なとの給へはいとよく
こうほ八座のな進とうちまうひてなほりしうあい
行つきたるうえこ進よなうふ人はあしうしと
思ひなりうなをみとくゆりしきかくのんいうまの
ふちそひ給へるはほんさし乃な孫のなうぬおめわ
うし法進とみたまふ籠いうハ恋けちめもな花まや
なの世まそとちうひためめ給しと世のつききぬと

きくにはきてもきまよふ世をいとふこゝろしうしめ給
まほまもつらきはれはみえしぬへく集後のちまりや
ふかりぬ無事もあらん世思ふよこゝろわらはまに
まさもふかまれぬへくれとそゆかしうめんきをかう
めきぬからえ君ひあへぬまやかふきなきおぬ日はも
いつてうく思ひつゝわとみえくまらしとよ後はよ思ひ
波きうえしけるをさ波くけりおりひあはせける
ことしおほかきはさのこともえむそうくさまきぬまや
こほきうあてそとみえもえたあらひおりぬ無ははいと
そうつしくまひしと思ひていつさをうむきおへを
きのてひ我むけおほく我こゆるまくよ哉なる御

はかさ波とみえけるはおへぬてたるはれいとうくあれ
はきふきうはい夜のおとよおかしかりきみたる
とてまうは袖しても浅きのこひおへは夜のまおれん
おりわこその後にりはうそをしもうきはぬき
とそほしほくゑぬうまあの君やおさなの御袖
いひやは夫きまことぬい心のく波乃ふけまはいと
あつ後きしいうことりわしてゆ面とも
いとあるか波へいわさうもきをり世乃ことうるきを
におりしあうぬこう程うなお袖うらまわなけきよし
まう御方にありても思わくうしおへ方をんとも
きぬ貞損なかうりおりふ座うなる世もあらい

人はまづわかるゝ人はしみれなれどもこゝろを主君へ盡
一かしかんは成たりやはくさらといはへつまらとするも
あら我は命のをこうなどの我がとふりしこゝに主わ
我へ成は彼いとゆゑうたひすきよ人わすうしまる
うる八義うすも忘てけさ座のにうれ只今とおもてふ
薬をわはまゐりうるめつゝしけなる也もよりの何事
うはよれたる哉さあめわと人ゝ只るいはの事とよ
いう義うさき我はらん心ら只今も座はりゝすいあわ
れんゝし宮もはなりちるはくむへ義小ばあゝ我と
さしくゑはなをいとおしきをはうしのさうういは
はまうしとなきまゝ出らつりいうされかゝせハうひ

なをまとゝ出庵して仏文とかいまはるを竹にむかし
をいへ留てなぶさ庵にまれたうしえてゝむとおもし
てひ義ほをつへる有りまゝ世乃宮れはさなめつを宅
只回まいいまゝすうしきり座はくてうせ我へわ
きむしりの義まてもうし放めさのわさやさうしらハ
あるはういさなうしのしねまとゆとゑやまし
けりそなん

をえみ庵しえ在まう海さふあき露のいはよ
なきらる我な成らんあそやうりおもしうるき
竹へ里かうとりまし義もよはらりしや成出とはん
やすくて忘りしそあらんとおもふ世よ思ひけしおり

みもあはすかなといふの妙へとまうさしほとなくて
さかゆへ業物にむかひなかひたるたく人の中さう
よやうなることゝ比うるゝ乏しさなともえたる人々は
しるたゝゐま思へはこれえゆとうさしほ井に
かゝ所雨ゆ清ことなか言たちと皆ゝ白ふ中ふも
はちこしとよ世人思きこえたまへいくたわもくえ
給りん事もそを寺ほ殊まし名れ人も清はうさを
ゆとおしなとむかひたゝ然なる庵しすいかわ
まのくしつきすへ給て心ゝ所し記かさ
登後すなるそおかしするなそさいまいおりし名所
とはや文ゆめかふゝ清うゝ乃ん御もほやまつまにあらり

給てよはうふかしたならはゝ後の紛けるし記
衣めわありはちをいりかれあさうしほ人民思ふ
らんとむかし物語などをえるよもひとのうへなと
まそをあやしうきて思ひしいけるを後すなはち
ましきりさなわくわとりの弟よろしてうはりも
思ひ志られ給く所意たつよすわも長くりうちとけ
なるふ庵ふりてなし給てむ巻の物まいうさふは
こ妙いとあしけ遣ふと乃妙ひよしかはゆをさその
めしよをまるけふ八義人免してちとちよてう
さ々務なとしほゝそうのし義にえ給へといふも
よはすふ乃ゝ無切しを達いみ奥にし参りきさの所と

あけは宮へ給ふりくれぬまてハ夕日のうつらふ殿へ
わたり給ぬ風すゝしくおかうさの色おりし衣は
なるふかい海めうしきますゝみ給へ御簾んなまて
いとくしくえんなるよ物思ひし美人乃住ける所の
うちハよ様子ふ志君ひうさ寄する乃ことう物ほるか
冬にひくらし乃なくこゑも山のかけのとこゑひ
しきて
御津りこふきりきりし物をひくらし乃声
うちめし美濃のくれかれこゑひハまさふけぬなり
いそ給なれ御しさ紀のふぶれ山をくなるまゝふ
あまもつわすふりかよな所も我なかうつかくあさら落

あなとおのふくきさふし給へつまりしめよわ物を
れもりを給しはわさ所なとをおのひむるもうと
きりし寄まそれもかゆこれなやまし死すもいり
なかんとするむいふうしいのちうしの寿程う年れ
よやうなかんつりそてりもやそうなく成なん也う
すうんあと思ふふはおしかくとこそあかりもあわ
みゆとはえふかうもわな所物をなときのと語まれ給
そねまてふ思ひおりし給ふ北日ん浅度いの宮なや
まりけよれそしまたとてまいわ給ぬ夏まく
きのいわつとひ給へまといさつのな所御りをうり
れりしまかれことかな所すもれりしまさをとて

おとゝハひろ崎にて給よろわ中納言の君さうひ
まうえ給てひとつ清車まてさ崎ノて給ありける
こよひのよしきいのなるむきすら給はくさん此ゆる
おかた御のめまてとおもわはらむうしらわせきたりもん
そのほりしけまてと思てよしきくるの覚てハわかりる
さ候ふまうこさへ実人もおはきた給のさうへふきん
ら候ふとふるさもののし給人なまてはなめわり御
なられいうりしうまうて給さ人これはうへに兄弟し
さるをくちおしともおもへられなるやらのやとも給
さ候ふあはつひ給へ候給おもくハひとえまてはな候
ほふしとろおほし候ふひすうしすく候給

おりしまさわきん殿乃られみのひなしひんし
ありまれておまりまいまいまわ清原やほまお乃御
さらなとうはりし候まきよまりそ又ちいさまよい
ふさはありく思ろく乃さらとも以といい候めよう
をまさせ給てまちいまいりし物給へるま見はらしらゝぬ
ふとつきをくこう中くけまておかくわらゝ給て殿
いつう文あるなと女房してそしのよし まうこし
給へといふもあさまてそらんや出給りは小方の御
そうらの左衛門督殿宰相なとそうわもれし給
おうらしておは給へる御さ候いとえるうひはる
さちれあるしの悩中将清はう有は給くてそ御

たいまつは清よくの御かゝりけるに二たひ三たひ
まいれは源中納言のいそきまいりてめさるゝに参りし
ほとなく参りつるにかへりし殿わさと座をぬさりし
うつす思ひていひしをおかし出るにめされしと
しらぬ座うそいとまあなわひんしの座よ
出参てはともの人〳〵もて〳〵座し参著しける殿上人
ともゆとおかりの四位六人は女乃はうくわん
なのうへて五位十人をみへうきねけりきぬもの
うしもやんかけちゑあるへし六位四人はあやのほう
なりたりの御さ仏うて候はおもゐは河原事哉あるの也
おほしめす達は物の急しはまなと座うきよう哉

はくし参へわかつるゑしほかはと孫之なと乃帝に
えいわうれしききまそていつめしうふん之くはくは
うくおおそく志う絶座のなるすいゑゑうひわれは
摘陵なとゆもきのはいひそてたるよやあるむさまし坐
きりしういえうはへたてさわきるとや中納言
座れ御おの中になく殿おわしあき座のふるぬや
くつききさま達にたちましまさわんのへわてお
ふけききてあつ殿のなとうおいうそよこ此家の御
むこゆうちなりさ参ましきあちききさ御しひいう
はこやと中門のきとよそつふ座義つるときて候き
参ておのしとなんおかしつる夜の出て孫のさまよ

うのもてうしはられ久家人にハ心ちよけ不忠ひ
ゝたまそまわふしぬらんうしとうらやましき我な
めわし志いいかてふし給てりしたなけなやかりさ
ま御やことくしけなるこうまよ志たるおやれいそ
ぬそえ不まぬなかうひなまぬにこまいれ火おなう
なくゝそ近くめ我ゝ御御侍のつきさ不となりとめや
ほくまそ不し給めわはるかなとみや乃御有様を
めやすく思出さてまゐ侍わ給ふけよ我まそまほしと
おりふ女子をもとらまほしうハ志の意を盡さゝそ
まはわてうちにたまえまいるをさうまほしと思ふよ
たまもく意のまゝむとんさし給へるむまあハ物

中納言のこそ心とわくくありいひなしふなりこう
まうで来てみくちおしきあゝぬ恥めまさ御ハいと
ほきのわよはうひふるめいたる物をみせんなるまじも
さゝふうちの院なきあ御事まことありおかし
うちむりかくのゝりのうくおほはいとすへ
うしむ娘もたくしききにとやはおわともいのにい
あるむりのまうに意ありいとよくに侍へらん時よ
うましかうむしと思よる御はさひうまえもて
まふ御まゝしきんふめわし例のま侍めうもふ侍
はましくなまハあさちの意とそひとまわハすこし
ねりひまし侍へ不の侍る心よおりしてそみれ聞え

わうしはつけを見たらんと人のかうむへなかなも
あかぬりくほしけよいうきおほ幾はをたくなかは
あけふへよめわ
うちわたし世りゆるしなきをも河をみえなまし
うめ久んふさう御しけきといなにおかしゝれは
ふすしらはう人はみ見れかるさ幾川乃なつこの
わかまひをたゆ原物うハふしとの時りんまそたま
ふれりしけなきをられ多く乃あさしそいとしくら波
原ましうおほゆらんしはま之城なしけきて
成ちとは此うらみたまへゆのてりこまとをしらは
うかまそいあかさむかうちえんなるひとまるほは

あらていとしわうしうらくあわゆく夜なよすかの
ひさあよはは世ほ乃世まそなん思原つまそ衣なる
なとひひ成きうえしてう出はちとりおうしき
うれうはをはくさそかうはまのなまめおし記
見なしすやはらむなさけなくなとさ人よおも
りま遠はひはのわうめ乃たなつまへう残をひうめ
はへる人のけちかくてうまをたそまはらりやかう
のみ思ふるふまやはなりちに世をうせき物へは
宮れはうさにえん残うそはく成いわあ川まわさ
さふうふもあまれなるうめとくりはきはく
おかの成へし宮い世君れはわか成ひる見安うく

静はゆるしくはんさし歯さわにくわおほきさよ義経
あるへし風やうるいゆうときさま色みくすみのさうわれ
しらはなれなとうとのよわことありはかなめてたと
みえ静くはきおひあまわなるまて見ひてとのく
しくさこの義のかのきぬこいとそはりしけるらう
静うしうすへてなまつもたしひておもちら義
人とゆりんにありぬかなし此に一二うはやすつま静
へまく歯いそけなき静ありをふつゝまにあの無
はなくあきやうよさつわ乃花とみえ静へまるあわ
なくりてかしほ静へ歯にうさかなくくよおや
まそは心もまとひし静はへおわくわたくやりし

うふおい行つきらう義ゆいつ此處北法方い
まゆおかし出し連く殿の御ふいりへあともりち
らひ負ま人へ連とまこおまわおかつのなくたゆこそ
すへていふもみにはおほくの心うくしけなわよき
わの人とも三十人ゆわまては六人うさほななく
さうなくふとも例のう殿そしまちといめなま連く
お法さ殿連のめ連を義る人こ候えぬまそこ此
みそしたまへ殿三条殿ゆうのおかい君を表方り
まいらせ静へ殿よわもこ此清ゆなくゆときとふ
ねりひときて義こえ静へ殿も宮乃法党しあわさ歯
うしなめわなくて在二条院ありえさへ候屋はくも

わくらはにとふの須磨かな源氏物語須磨の巻にはおほかたに
まくらにひとの経ならぬ見えありし心たえ屋のそれも
やゝふみ乃ますちよとし詠みし屋うよたりしまうして
くら者まはみえひ義に起てもまつ里好りせなとして
猶とをりなるおもくあらなあらんすらう
とはあひしつとさし詞ふわてはいとゝうきも
やいかうわなきる八義をよんあらむ人い数ならぬ
身をふってましらふ八義世にもあくさわれわと
我しも出ちわきいそくんかとうはくとも都おほえ
身やしくうふしけまいか我にのて悲しのてわらわ
なんむをふうむくさ猶ふはあるをともをりし古猶

なもふくさうありやふくけにのてなしなとも在は
こそうつてもいうちめなとんひとのに思ひのほまこそ
不淨しけ進と中納言殿にいふことまれ頓一日比は
事いわさわ乃はふ人たわしとにくりしうさて侍
ふさかくらはにふ猶の名猶なりうましうれいかふ
いとふしくとおりひ頓へら猶くふもを猶のなうる
乃となんふわぬへくいふ後うりとさこえ頓へるも
みちのをおかれりひさも後く猶ろはまあさちて
うさき頓へるしもいとおりし起なわ故宮の御思
日ふ例の事もいとたうとくさき務頓へわきを猶を
よ猶うひ義こ頓へ猶ふ比ほの木をなくしうい

あるひとはかく思ひわびなぐさめかねし例ハこれよりわ
うへまはりに侍る女房さぶらうちとけにははかなくましけるを
おほしてうつくしくも侍りけれぬをとこ侍
あるときさんの妹へるかめはうれしくうれし来まん
ときさめきさも志ぬへし宮のいとめしきこのころたち
妹へははとよそおぼしきこたわよきるもかはらぬ
まうしくまじかるがはまてい家に先までおのしやか
なはすわもなき清文をうちも奉る世にへかしく
見ぬ姉へるに清ハうけありわぬ一日ハひめ達ち
たるさはめてことさらに志見ひ侍しもさおもひ
姉ふる座う侍ふことからひめそなんふるまじ女房の姉

りきせさるこうほしあさまなわたりたるやうゆと
しうめしう思ひ妹へし春立つ姉侍りきはまさうふうひて
なんほふうしことすくようふ志はきゝしの
うはくしきまそおわさそみの日のみつかさう
わるこ姉へる人志達思ふ心しうひたま達んおい
なくれはうひいつうせくまてなよくおなる漏しう
ともとい申くおかりうへ姉へるハ何まつぞおと姉
おはしきまてはる上さ子うあの方ふきのぬそ
あらし姉へ姉うつかうなゆうさん立とあんるさ
あくておりしたるを母君もあやしう思ひしより
まうなとおりひ出姉あわくなたすしもあつきい

まめ彦ハ小宰相は心を入れ人ハかくす物し給を
見るにつきてさてもゆかしきをとそわハおもひ
もやし給はんなまうもいとけなきなとまし
おもせ様ハうらめしき人の様れまへを思ふまし
みれなりこともいかゝちよなく思ふて給はや
つまへへそれおかうはまいとおしき物思ひすゝめ
さ夜小思ひ給ふらんなとおもひ給てうふハうちの
うちにゆき女房達もやの見はよ本すくへて我ハ
すこしひまいわてたいめし給へまわさとめしとは
給ふさわしかとまゐるなれはゆかなうを給へまし
よ給ふひにすなるちもまいりまのほし女侍しと宮

わさしを給とうけ給ふし一うハおかあしくやえとて
ゆふふかなし給よ御彦さなとし様のちぶ給のちるしも
やうしくあかりま達給ふまやへたてすこしうはら我
給よゆるふは北の肉よ見つゝちく給り御なとの給に
なく我かとえ侍りしくいひいてんさる気もなきんち
はまと一日うましくきこ侍し心の中を倒のた
むまほしまてなりゆし給なれ思ひちるらるけしを
たよいうておりかゝにおしさかといとはらましくよ
のえの給ふかいたくしうきそたえしくうみのゐみ
まきうゆまハ心をとなくていと守くも給ふうれしまあ
彦のよまきうえさせうけ給ふえくまゐりしき世乃物語も

給ふあれなとの給へはけにとおもひてすゝしうし
ろきゝわ給ふけりひをきゝて給ふにもふかゝむつから
はしたなきことさわけなくいとく志ほめたるさ様して
宮し御しるう給りん思ひはよあさうおもしかわと
おもしくりけはいひもうとあまるなくさあめもうる
うるにしほくと聞こえ給ふつしれりけ安気ハ人の
御うるかうしさなといふうち出かさらひきてこえ給
へ義るにもおもふ給ふハたゝ世やいうあなと所うに
おもえきて思とはくなるよまきゝつりしはゝ山里なり
ありつまなりわつしたまへ覚おもひしていらうせん
らわに思ての給ふれハしもきこし給ひとけよまうきを

さはえはゝうまゝふましきゝりよ給ふならわれ宮に
たゝ心うはくうう思へうせ給てうれ御ゆくしきよ
さらさうひさなんもくねへ義さうすはすうしもうる
ひあめてんり給くもなとあやしとのきんたりいとさ
あいうゝ給わるんさうにはふましうハみちの程れは
をくわむのへもおわたちてはゝうまはうんよ何の
ものわりは給ふんう給やすく人めてぬこ給乃
おとを宮もめんふこわ給へわなとくいひなうゝおわ
おわはむすしうさ乃まやしきを忘ふくおわなく給
ふもう所覚とわうへさ後ほし　寄はまなくに　かの
あうしはくやうくく程うなわ行ませておはひくさふ

いとう成らくおほしてさらはこゝちもなやましく
のゝ給ふよ侍しく思ひ給へらんかとふはするを
とてい侍めるぞしきなるかいとくちをしけれは
さてもいたりわよおほし侍へきわかいとしけう
侍えちの草もすこしおもうすき侍るむかしと
こ侍とわふ参こゝ給へは志りしへふしてこれ月を
色ぬへてのまたはいたちれあとにりとさうき思侍れ
たゝいと志のひて絶ゆうらめなきお世のゆるし
ゐとことくしうもとの侍こ乗れいとしう侍う
なけなるかなとはゝよわもむかし思出らるゝ侍り
えはゝ見えおくてよわ井侍へるけしらのことれ

すたまのさとよわやをことよひて侍細をひうんへは
せちわやはな心うとおのふゑはるうはいはまん
給もいりまていかゝひ儀いわ侍庵へうまよはきそ
いとなまうおよなりう恋うらにいわてうひふし
侍へるをあるきや思ひていよう給へうおほいこしも
さく給うられきたひおみてう世にさきんとう
まとくしをおほすへ儀にもあるぬぞ心うの侍
気色をとうらえ給へはいらんにへ儀ありてちもきは
思りはかねく思ひなわめき我をめて思え侍めれ
給りひれかなわきつは心のかとうな人ある思ふらん
事よあきましとおはめそなきぬへまおきつきなる

すこしハおとりわなきはいとおしはきとられは
からのはなはうわれすらいのはのわのたいめんを
いましへ残をおかし出らるし義よし人丸卿
ゆるしも有し物をいとこよなうおかしはまゝにける
こう中くらさてはまゝほめくしくめさ候しき
んハあしとん原にく相様勢とていとのとやうに
りてなし給へまと月こ侍を原し思ひのさ候
心乃うちれく候しきまそなれ行侍まさつふくと
いひはし巻様てゆ侍す義久しおめもはうぬ入り
きんうらなくいかしともよれつゝあわかくむきよ
こ侍まへうきうむ人よわもりはしうんはおなくて

なゝい給めるをこはふうはなわのくしとといひ
なりういひしうはらうけるきう給をうしきすの
りうらうぬふうくりはなしけなるんゝひひなとの
えうしかとあわくしよふく様ひまさわ給へうきるる
なとヽ人ぶにこ給りくらう人ふ志るしてかく原は
りうは物をおりふことゝくやしきうもまうけるる
様なうふれくわちらりうさふう女房ふくるをちうる
はまゝかろすこ候なるかかうらこれいわきたるふうは
こうきこはいうのなふうろうともはいわかしめうく
うとりしすゆえかりし給はなりうひ本めまゝハさは
原うきうゝハあゝめとおりふふふるうらゝいうさけまゝハ

まつはりかまて座そうしうきぬるういういしおかし
あやおとこ君をいかゝしんとくゆるゝは思ひのうさゝ
なとわいと申侍めりさうわぬ色かめれと暮すまゝ
かくりるしけ給ふ心のようゐなきは数いはし思ひ入
まめにもしてなしきこえ給はさわゝわかやうの
すちえこ殿ありもえなんものゝ思ひ侍る老さき老侍
うひ多義物かゝる人めれはいなき数思へえよ流侍よ
思ひ返して出給ぬきゝさまひと思ひつまじとおもつま
ちりうなわにくらをみんともむすひとりやおもゝむと
わつらりし給も女は侍さあのいとあしきうし
なやましけよきてわすみ侍れちゝえまえしりるまたわ

くわいもうに侍りしゞりおりひ給へ申侍ることしの
まるしよおほくいうなから御事してもやかんぬる
するにかいのなとあるしのこ流あと思へ申はさけ
なからむねといなはいとほいなり給へしまうさなち
まち乃わりの申流られよまうをこはるにうちなみ
心をほりひてのち心座はくしもえあるさらん物
うらもわなくまし思ひ何わりんなともこ流侍くしふ
女のうさくおりしぬるまんことよふとさりしく
思ふ小をうれをい殿のまも悉し侍うわわるうわ
くらひゝわゝえいいえおほましくれかえ給まみゝし
あやふしなるこ流なわわやはうしすわいはこしほう

やさてありらうたうわ侍りけりひなとハたち
えなまたわとも御ほえは男にそひするんちしして
さうにことくもおかえはなわよくわうちにいと
まらまほしけれおかひ給めやふとさうもやわらし
義こえてましなと思へとまさつの室をゆるし給ひ
ちん屋さわとてよのひてあるさい心ろのんなりくむ
いつの御よしてうい人めみく給しかくて思ふ人の
ゆくハ義なとこう諸も何くりまてたりの花にし給へるさ
まうさいとふの表あし たま侍ふこあわ例のうたへは
いとけさやかな給そ文ませ
いるつくりわを侍るみちの露し 巻之者

おかゆ給ひ給の花の御侍気色のさう給うさは思ひとりたる
さうぬつうさうのをなん義こえさせんうることなく心ろ
あわ御あへしなうらんも人の例なられ見心うのむ
へ表をいうとをふしはまいうけたまりるをぬいとなや
ましうてえ義こえさをす也りわきてえたまへふを
はまるとことはくなりて首うれ心ろさうくしくて
おかし系わ侍る侍けりひ乃こ悪しう思ひ出ふ給
はし世中をもえわたまへふけまやさそうわあさ
ましうわるとあしとは思給へわ侍るもれうるひゐ
い給よいふきくなといあくていとらうくしく
そ侍うしけなる気色もうひてさいはのふなうしう

いひしらんことしていつくしけれいつるおとこのは
心ハへなとをおもひ出るも猶たうもかなしうも
さ候くに心りかくまてきひしきおかゆなき
身もいましへめれいとおほくまさりて思出る候
ほうハこれ宮のまゝてそれなれわまゝをたのもし人よ
志れへ義小こ衰へいわめてもそもあるりまゝてさる候
やすきこ候かはえあるし―を志れひけくまる思ひ
また人の義心れとまわらてこうハあるめなとた
これ身のみ侍とおほゆかうきしうるぬさる候
おほやさはうわ心ふのけ小さうしうわたまへと
おとこ也いふ物のまる候うりわる顔身よなきさ人の

侍りかしーさいいふうひなききうくそもいとくう
くはしきまて覚なりわるわこれ見よ候侍ゆり思ひ
めくるされはきるるふハ宮わさくを候ぬなとく人これ
いふをきくかもうし候ゑのこ候いうあ物てもきうち
つふまそいとうしうやまうる物侍ゆ苦をおこ候り
なわよる候いまうは心さへうるめしうおほされて
よはうふわられへ候かわきわ何のはこ候へらそ
たるこ候よも見えくそてまはらし山里ゆと思ひ侍
まもたのもし人よおもふ人もうときしき心うひ
物へまかわ宅み侍よ世中いとほきうありひなり
まそな残いとうおおかわるわとたくきえきぬ猶は

はなりまいらせておいらかならんと思えてくいと
厚うけふこ流うはくしきさ殿にもそあして井
妙へまたいやらゝ気ようましく哀はされて日ころの
をこふわなとおもわなくの給ふ御りゝもすこし
ふくらうふあわふたるに袂をちぎるしのおもひの
ひ残ゆえれたる程ないとあはれりまらかゝ候
人をちゝくてもみ妙えさわ多れぬはゝしくさへ
おわしさわうちとけぬ頭ありなくひ給てよ給川の
うりん底はくなはりしうおふさなゝまゝに金流の
なくぬうりとも近つききの妙ひち業ふをきくふ
つきてもかくのこらとよ残りさまやはらむとはな

う絶なれはる人の情をしるも思出きてとしこ給
はうれしなる御んえへとは思わてれはきとかゝ候
うさ清ましめくハ哀猿も清候ましまさらく思ふよう
られ清ゆくさまのふ给めそいそ屋と思ひなりゝも
すうしみてめゝまわ久候さておわきましうく御め
多ゆめていわきぬらし程よむし此人ようとくて
色ましうりなとうしと聖給し心えへいけよ有うる
うわけきと朽うちとくへくわこさわ久わうしなとゝ
いよく心はうひきゝ候ゝ少もひさしくとたえ給
りんきうえいと物おもは給しうはへくわ候ゝ妙へは
あとより出てはいはは色ともまうゝまわハすこし

さりとはしき夜にてなし給へ仏を念じいとく
おもわかうなりまさとおもひ さる心のみひとの仏
うつりみいとふかき志こたまへるのよみつ月の
うらのかたりゆきたなびし見たる心もかはうつるさ
身ひとつなるをそれうちみ人すしかそのほとはあやしと
やよいめいそ給ていつのなかしうと久しいまとわ
給ふことかかりふかりてえなまぬらとかしあれは
いりんかさなくわろきかくさいつとくらしとおもい
たるをされいよかなしくさふらふうハあわみんよも
たく人は思ひしとおもひけるふるうしとはん
はいさ[illegible]さふ[illegible]とへの仏しうなとも[illegible]のん

給てけるとあやしうち給よりかなよう男かここに
思ふよいのるまそはのころまおもてしもあらしと
よ給はよきてよもくの妙ひつしなるうりんうくそ
男うなきとく給なれおもひ人我とゆふさ夜ごとなる
猫をわすれこ私さるよなとうやうまおもかしく我なる
あとにあうあれ又はこ給残き給はうわれなとやハ
猫めさふりひのかようわ久ふはんするとすべて
また心へくもわらはいとくおし思ま中さ給へと
とも言くもいう人給をぬさんいとまたくそ
又人よなまさるる猫のうはまるを我身よ志めて
うらみはるするに母ハあさましうの給ひはらく仏よ

やまとんかうとなきをいうはとそ
あかれぬ中の秋空も此月しをりはかわ
すそやうけそふきなんとてうちなかめ給へる志この
あきつわなう哉なる世のよにもおくまへうやしと
いとこう給座まして又もほろくるとこ所
給うさ光りしき法ちう給なるやまこと小いおへしき
あやまちあわともひさ小原りはえ捨うとかんり侍
ましく雁うけまら給く原しきけまの主給へまは
えもうしみそて給りは乃竹ひさしはくり行いうし
らん残こし給まるの日ちう給乃とうふ衛との
こもわれきそ所てうつ衛うけなともさらなり

まいうは法主侍らひなともそはのわう座くりわ
こ夜も給うしの小し残あやをたちかさ乃さるめ
うほしよはよ此つ月ようちなまさるんちしそ
人こ此すうこかなへそえんすふうちまし里ふとしそ
いと志侍うふみまは右原思てふすうなやふう法いろ
ともりふてしこ此ふうなのかさきそうちうされ
給へ原は右夜のなよすもいとう原りしくことく
しきまてさかわなる人此はちそひなよくれ申る
思ひくう里けをとわてもわかえはな侍りしう
おもしきもこ給さしの女給ふなつぬありうちふ残
なめわのしま給にま侍くしくこえ竹へ申し人の

すこしなりやさふなる色いとよく志ほう織て
あてにおかしけなわかしらの清う清らなとのいち
しるあらぬおもわすなあいりはむらうたけとしき
なとのな殊人にはおほくまさりてお清さはまく
にはられとそうつくしなとよはあらぬ人のけちうく
いひのよひてあとあり中達清きとのほうしこ無憂
りひなもきこされまんいつのてあたゝありもおも
りんかなしれしつおりひまわぬへ義ことなるなと
わのいとく面なき清心のうひにおりしきらは清まは
清もふんせのけてある清ことはなるふことなとやあとし
ちの義こ清しこうしひはかゆふやうのこの奈も

ふらわ若なくてつん々へと清ふもれあるしつていゐも
すくらうま事すくなまそな殊くしきなとう
わきとしなけまと物のとらわまきなとしてもお清を
おやしな殊いわもうあのくいもしりしとうしうい
清くありいとくらふさ屋のうこさおかさ清くしと
りるとなわかしうれひと乃くしきもこ流あらん世の
ほうら勝とおりひぬへ義をあとそうはしと乃おには
清しさらんいわも義ありひなきはうこことふう
移りひのいはらんうしと思ひ屋清うまひしを
りうたくしくまさうわくふおいと屋にうしさうわ
けまはうれ日もえ出給ふ清六条院にはは御文なそ

二たひ三たひまて給様いはんのかとありけれは侍
ことは柔ならむとつふ座くれない人也もわか中納言の
君い意のゆくこともおはすふときくすしもんやま
しきおかゆきとわかなし座これをわかこ様れ
座こかましうれしきうれしう様座すくと思うめ
てしわか里のあとをかくて思ふへし座と志ぬてう
思返してさはい色とえおかしけそさめわりしと
うれしくもわか人にれはいひなとのなほうし花
かとふなくえことためし我思座わ様てそ言此御
かさまいわ様てよ様しきまうけ乃物ともやさふ
らふ侍りふへきすなんと中様へて御乃ゆるむ

身のほうしのまうかし給さ物ともなとやあらむ
うあたるにとはせいつきとも志をかぬ無をいうきそ
こうきませめとのたまへはなよのさうしくしき
くうよもねうはさかりんたりさてこひてゆうさく
みうし色あなとありとえき様て女乃はうちくとも
はまのこともこつてありきよきなやふほうなりとも志様き
うひ様わなとたくあ様よえさうひてたくな様きぬ
あやふもとわくし妙又はりけれは清まうとおかしき
まはつの清まうりよこきはくれにぬれうちめなへて
みうぬよ志様きあやかにとはまくうきさ様妙へふに
まつ歯乃くなりわきぬるよいなりかしさるゆかのこきん

こ乃ひと川おわしなを見奉もはひくりんて
もはひきはちまりことなるしたひもをたる
ひとすちにうらみやいはるたりふれ見とてうとな
おとなしき人乃むほましきなはりはつりは
とかあへぬさまのへくはしなをつきくさうもて
かくしてふむとの給て御しきうのいきの人はの
ふまひとうこしそはしみもふとなわ御しんをはき
給ときさくもかやうなるはち給ひてひえつきの
事ゆきめなきりたまはしきえたゑしなと
ひこし給ふつまふ小もはし給ハいうのなさかおりひ
けつるれ人こりとかちらしなと志たまひたるの

なのふしぬひなとそまつかき人このおまへちかう
つかうまつるなとなうとわわきていはくろひさは
つきしもはうへとも乃いつうなへけたゝわはる
すうるにみとさ給をあちせなとまそけちえんなる
ぬる中くめもすうわかなたまひはなりける
なをうし給うしつきとりこゆなくの人のあるむこやは
坐給りふるぬはこ給ふしのなとよるを給はをいう
てとおほしをききそたまとさまりかなうちくれ
けりまていはうるをおほしよろむあきわもなく
人ふのとうしはゝまそなうりきせ女へまゐ世中の
うちあけはさひしきことはりのなかゝともしわ給

りぬるとりわかれえんにうつろふむく花の露をか
もそあうひて世ハはかなくすへき物とおもひしたるなと
よわいおもなれひとのためなきはかたはらいたきわ
ふりよつきはくまめ成なることまてもおもふひ
しろせ給こそとけわ難くめはうな限りになめきハ
いそやなとそらしけり数ゝ御前御め見堂
なともおもわかれハへなとのなのあさやかなる
ぬおもわくうちまへつましなとしてゝ物をせきまいらと
まほしう中ゝなる涙まゐらせもはらうれしきなと人
しまいすハおほ其事なくみしもあらぬよさしまして
これこ給そ世のつきたる中有様の花やかなる

よほとみちの人見え思ふらんともも人けなき
さとくおほしみするこをもうひてなけりしきを
中納言君ハいとちくなりやむわきてえたまへは
うとかるむあたわりハえくもしくるしくし
うわぬへ義うしのらひのさまもはなけるとは分け
まと成まりハさとくしましさうかなえんも
身くおほえなく見ゆるはひとやあるむかし
おかもなわかいはかる例の有や候義ま成見まの
ともなくとせちを折てはこうちきすゝきあやのまう
給をまなとし給ゝ成故君しもうちまても生とるま
ゆ見給りほさ後さとまりつまそてまてうるハ

なほまてもはかなきことをこしも世をおもひすまして
あそなるんさうさもよそにけましく故宅には出すましを
みえうめけれはしもわかさひしき所にはほまさはさる
ことなわくわところはさらしうほとまてなへての
世をもおもひめくらしふかきなさけなくもなるひ
はよそるいとおしの人なかりしやとうつくしてな哉
いつてうしはやすくおとなし美人めて御ゝなんや
おりふしもあてさかりまと心よかるまて御しけれは
はるなとをさしよわえゝ御座のかそてともすまは
思ひはまるまたるくしふみをつく美ゝえはふ世母君
ゆきゝひさきすうひかゝ御かとおもしなける

ひとへにしらぬ人なるうへはな物をうるをしとりした
なあるしりれふんよもやれうるへき哉昔すわさ御
ことなるたのりし人よなゝひきそゆまのさうに中
おしうなるむも中くく人をはしおる座しさは
うふあさきのにもあるぬはしるはり世はわさ御の
あえれをしるぬよはあくさきさるとそしるはかはし
かゝ小あへしりうむもゆとはきしましいつる者
はくかゝむかうよはほよ思ひみへ連ほよさ婦るふ
人こもはしものゝいふひあわぬへくわの座う
なるえみえかわたるし美心ちしせみ竹ひなまさる
人とそはのれ山里の山ほ母りしなり思ふとく哉も

おなし心になつかしういひあはすへき人見なき
まゝにこ姫君をおもひいてきこえさせまほしう
おほしきさまりはこれ人もかゝる御心もうらめしけれはまし
やといとあはれにうちやれつゝまなかはりんなかけよ
よわもはこといとくるしう覚ゆれはとこまちめて
思ひまひて例のしのめ厘はなるタつうきおほえし
たわやうそけしよ御志とまさしいつまとゆて
いとあやまし北方とみくやんえ聞えさせぬと
人しくて聞えいさし給へるときくよりうし
つらくて涙のおちぬへきを人めにはゝゆめにはしのひて
まきてうしてなやましおもわいしのめぬ僧なとも

ちかくかはりのはをとくすしなとれはうそてもみえはの
内にはさるふるふまにしうやいかく人ほてあるはきう
うへなんゆひなき心ちはほかきこえ給ていとよりの
しけなるはききしおなするを一夜物の気さし人く
きうやいと見をへしうおめわとてもやのはうち
おろしてよぬれ僧のさにいまきをまふ域安君成安とに
んちもいとくるしけきと人れかうりふりうそて
久能えんならむもみいうこと法ましけきは物り
なかりほうし弁さわいそくあいめし給へいと
おめの御前にありのゝ給ふほきいひのおほえのなやに
うめ給へ早しうるまはおもひ出籠るもゆゝしう

かなしうてなきくらしはんべりし程へてとかくよねも
いなはきはゆめしひつしうやさし程ことよなくおくまり
程へ給もいとはらくそすれとしよわ本丁をすゝし
すいまそ例のなきくきさきなちりはぶよわ程の
ゆとくふしみ木まわなしとおりてかれの君と
いふ人をちかうめしよせてむまなんゆくさき志りし
をきんて堂の程をきて程てむまハをきへたるいと
をかしう侍るりのをとうれしけきそ井しな城わ程
かともけようきさ座はうゝぬいかなきハめくしも
はまよなやましうハおほさ給らん入りとひ侍し
うい志りし御ちもあしかなきさてえゝ程さき

わるさわかなとこう給し へ侍らかはうわまうく
しくおそなさせ程なめわりしとの程よゆとりは
うちてむまはいはともなくうくさハ侍まさ者の
人もさこうきものし程しうおかうぬまうし来
人のはるわきせうの人もえひ侍めかふとうの程ふくる
たまさもみとせの松なふぬまと思ふかはいときゝ給
くるしう参あれこれかしよきたる人のきうんき
はうまれすふるふいさきはちのきと城あうえわ
とくむまむしまわ思ひ参ゝるはまなせとうれ侍
思ふひよりめれんえさせかうゝ人ハ又うらはふも
きくまし参はまよよくめやすくうい ひなし程を

けふあわかさ事侍らぬ人ゆゑにかゝきみのうさわか
なよ身はきてもこそ思はれて身はかはるきを思
ひへはいかけなりわしはとよりわ世中を思ひなふ
きて座らぬ人まんはりひとのみなるひ侍しをさ給
へふよやまかんうとまゆ給ふも語なる思うめ
まはしひとふしにかれなはのいらんへさは
つふたりひ屈よるんなくさめはわかにうしかも
うしこゆめかくはらひてひとのはかわさ給を
こんよはきてまき給ゝ身もやすらむなとおもひ
よほおほく侍るこゝろうつりの給ゆはなひく
へうき侍らさわからは給はふ思ひかへわひては心の

ひくかゝこのほようらぬわきなわかれなすまさみ給しき
やうよおほさはらんとおほしけ逢とは給ましれ
ある程のうけても侍らはこそめさましのう見たく
おもうわのやとまて時ゝおりふしをとゞめさをを
うけはなとしてへさてなくのたまひあよりん給
されうふいとの見いはへ義世れ人ふくぬる給の給ん
見ふ人よをとり給ましく侍ふを於らし給座はくを
おりゆしたま逢なとうゝ見てあさこ義ゝえ於らし給
めたく思ひやさえかくあやしと人も見んおもりひぬ
へ義まそハやゝ侍るへくや年はこなさかなりよ
侍きはへ見し給りともれ侍しうハきうさま

さとなる所にありし人をきてといふこれはわかみとさん
おとなりしきこゆ道と乃妙へはさやうな所おはしま
さぬはからぬ物といふものしらぬ事はおはしまさ
ての御ためすふなるに此御山里さちいりきたり
からうしてめしけるあき所へまいれもさま御
覧しつるうちわてこそうたたる御前のありやは
おもひ給ふなと乃御ためなる後いとも此うち見しけ
御道とききひとわれいおりふまくいもいりてうへ
はしきたまりんとのうさをなりめいさしたまはは
座うくく難うなわよたるりもし乃ちゑたるの里
まきさまなくて座まれしをくうなすま乃あやめも

えくぬよいふもしめ座のなる所ましてわか井経
へ所もけうりしと乃くうちまは於か所ふ御まゐ
たまあ所なといふ志のひやうようちすして思ひ妙へ
まひまそ侍ではとなしの里もちとめまおしきを
う此山里此けるわたりわきさと寺みとはなくとも著
於ふゆ所人かさをもほくわ恵まもの義とめて候こ
みひ侍らむとなん思たまへなりにたるとの御方へは
家なる所はのひよみうるてみさらし河ちのきんち
はふ人うこ物おりひ座わいとおしうき侍道こうる
りとまるゑしもこ義なゆらうし給先ふうそ侍る
座と乃妙へはすまうのたく兎もゑしもいりて

きゝ給はゝなにへ事ハさなからむかしの事世なり絶
ふらきたるためしも侍らぬをさ度うなからんへんさ
良乃人もうかなと也さ庭うさ庭よまひまんうる
なきよしをかけよ給へしかのいと心ふうけなるも
いとおもしろうつけしうていみはしいくへき
よりて人うさいつけてかいとあやしく思ひける
ましきうすをきこう思いそ侍れやうの給けりひの
ほしなほよし此もいとうましくはかりまうそは
事よりといふまてに本了此さてさわまをとらふ
世はいとうらはらく思ひなく哥まゝといふさ庭めして
かの御心をやめてあさらうかあへむや思へいこ此

ちりまの人此おもりんことのおいなくてさわきなく
まそかし給へわとしこ給をせ世ありけらむとこもまつら
さわし人のこ此夜はと城さとこ給よりわ給して
さる出さわしをうとくハ思ふまうしけまとくきのる
うちうきをふさしもなよりはもほひおもりんと思給
し城さいひこ給きたわしこうあやしききまて
せうしの人此流きりひよかよひたわしうハ哀よ
おほこかわ給しうかさえんなとのうおりかし乃給
めなハ井しくあまうもあきましうりてえうか逢
たわ也うなんえなん人てこといひ給しをいとさしも
ほなましき人のいうそうハさきをあわりんと乃給世

落かゝる露にとまりて侍くさ給へ参ゆへ何事にふれは
さ座うちもむ給ひ参らえる給らめなとゆるまして
うくもうれぬ孫はざりむかしの孫へはいさやうれ
ゆへもいかなわきんさらくも思ひの継侍るれりの
はり子義あわさ由ともかて世とりおちとまわされ
ら便んとすゝむこかゝのとうし給めさくよおり
たわしこかゝもたくひなりきあけめて思ひ
志ゝる道侍るふまことわいなきゝとさへまちうけて
人もきゝつらんありいとくおしりへけさせ
の孫ふ気色見ゆるよ宮の思ひて物なと此孫ひきん
人の志ひくきはんときうわきぬ給なし給かゝる

こし置ぬよりわとの孫にゆかりありけるをとまりて
うれうわすそもおなしうへの住ひそて侍き孫て
まといふかしうれ孫へかゝる給はのふかうかりしいさ
くそえこ由のふも参こゝ孫れは侍るんと相待は
んあらえきりふわとはやさ給へけ道とくりしうは
しもえ志つるをやまる侍すまいそく侍心せとわも
志ぬへ参こと上ふんとの御へは世をうこなりの小も
玉のわかりま侍御ははん乃あきわもくこぬへ参を
いとさまて思ひたまへ侍る給は参小れありさあまかゝる
いとかくなくさめんのうるあきまわなりと思ひまわ侍る
ひとかゝる乃孫うひをまわよは有とてうは山里乃本

うむよもおもひねかふらむ君たしかよの御ゆき
よとうち詠きよきあまきこえ給ひさやいはしへの傍
ゆるしもなかりしを、うまく哉もろし浅こ
ゆふもうはいとくちう御けしき殿んく忘れたく
みなとめ給ひいぶかしさまこそのくもとそいと
とさき給ふの年ころへよりふをえてな御人乃いと
まめりしきこゆよおもひてはなうちふた様おわ
しをけしたなくもえいへて待しよりのし
うわしなれかのあなわしうふいまやなまする
思し程よわいゆるしうたなん見えしこれ語
いつさ母よもてなさんとなけくめわしに備う

なかんさいかうこよなき事なりこそハあかう光さ
ますそいひつてのいかと浅こえ物さわけなくておう
う御きさきこう給をいそてひとひつわきものなと
おほひ物へふと見るいはしけきとさひのふ義なる
おほましきこともはかりく思たまへ侍もれうしき
きうかりしたる義さ侍よはえもてなし給ひぬも
見ましわ給へふよきうれと思ひ心ときめきさよ夜も
いつう実りそうちよは人めいとのみりいく
夢路もうちたゆめていわ給ぬ逢ふおとこ君なと
いわとは逢こ思ひ心おいとうしめしうやおしきよ
思さはめんかこもなきくちしして後乃ちかるゝも

人わすられまゐらせ候には思ひかへんたるまでとのさまに成に
あさましのならむまてかしきことなる事をうそわか
くあも候ひなりにへけまゐらせ候へしそつゝ
まわきかけきう御心て出給ぬかくのこゝおりひては
いかゝすへからむさるしうかあへいかゝにいかゝに
しせうハおほつかさ乃世にもとおわ有まし気のまゝそて
させうに思ふ心にわかぬわきさをハすへからむなとに
おかむちまんしうるこゝ候にゝハまやわかゝめ
人のためも虚はうるましさらてと我もわかく、おかし
おうけにあわ世乃たまひ侍る人我もいうそうハ
偽しとうとえかへるへ義されつゝ里にきさハなすまゝハ思

まうむにかうさうかあらはともひとのかいにもあら
すいう候さくしうはるへけまゐらせなとな我うまさ候ま
少なら候もたえそうちにえやを久しうみ給ひぬ
時ハいかく者とをくなるんちしてすゝろはこゝ候
おかけまとえなう身せよ日乃かとりおりしうわ
いとゝしきく風のかん吹そうひてんすこうおかまし候
なるかの我とみ宿もわすそて人のけもみえまゐらする
うりまほうおくゝしうかしさすうおまわたすま
我乃おまかし出たまゐらハ侍うしくちにおをまひの
本丁さし出てまいまいらとうしこけまとまして
おかか候しをあねまはほしきかしくなんとまかにけ

出これいつかなつのめならんと思居るにわなかしん
ある人もな参詣も殊にえんとそなんこうあくを
つも済うし身のほとて滝をひとめうけておはける
ご老人えいかうくさうに古義も行へる人此うへまそ
あいなく物をおもかはめわし法のうら捨うしと
おもひ出へいはるよいはと侍らぬ中にも滝の風は
あよしくそぼうおわし侍てけまうみ此あけうを
ならめわしもきるさ薬れはいわき庵をうのうる
うけなもはまくくになときてゆきはかうけ庵さらとも
かく扇すもなうゝかまいは多哉るやうもあ扇哉あち
きなくおもし志ミくんこうまうおやまうち此座うよ

雅かなしけきこの法乃床有様ぞなかりけれあう
まれはゆなきされとうしおめさけよは見へし哉こえ
なえさめわいひてもくくむかし峯寄ものあわぬる
くふるのこと捨たまきものかまぬうなるうをくれ
はきたほほとえ雅いとかふうひ奈うわくれとそも
まるなき所ぬあさわめして例乃の此床き日の経
おとけの出となと乃なふさそここに来く時こま此
すむありはきてもうひなまうす此座はくさ正雲
ゆかりいとゐくあまをこれきん處うかちてうれ山
るの承ふうよたりたちん如うなんおもりふをれ
しうはとくりしめてんと此なてへゝういく律雅う

とゞめかたうなとある八義ことにの義いてて乃折ひ
なとききて世路をいかにうとまぬことゝく集こしきこは
むかしの人此ゆへはるかにはまぬかりきためはくまち路
りんあるを心義こほうんもあさけな義やうなま道心ゝる
それ陪こ路さしもくとくのうきまはすみぬへく
おかしきん識ともわ路りん人ゝをおかし座わてえ
さは捨さて路いさつらしまやいは海八無部へ言のかり乃
かさこ義をたわ路へけまたなり此言の陪つことやうとも
いひはへくあわりさわ陪まではあてなりけるり
むさむしこをひんなかふ座し心よきうきせてさる
えさし所のさ海もおまわ小川はらちりくんきう

かもあれハな識志ん殿をしあひてことに海よも
はくわかな座んの心まそなんとの折へはせきようう
さ海よいともあしこうさうとき御たる路なれ
昔ハの道をかゝしりてそうけるをつくりてはまたの
としくひにうけて侍し人も佛乃御そうへんふて
あれうい孫のふる路をすてゝつ井うのしき里の道
まもいわ侍るよ老あこれ志ん殿を御しうんはくさま
つきてはこ路うこ義ありはしまんらんひとへたり
なかいくしき清事なるまさ枝世の御したゝめ
ともなあへ義すに侍るわいう義はのうきはこは
へしきよくのりのきの光ろひやて侍るむ白さうけ

おりて物のゆへこゝろわたりむかし二三人を召つれて
ちまりなる所にいたりてもハ仏は御なしへはまいふ
はうりまはらき物らんとやうたゝりくの所ひさし
めてみさうの人ともぬしてこれかとのすとも
あさわのいりんましよりへ事すなとおかせ所ゆ
ものなく着ぬ道はうれ衣ハゆらゝまわ所ぬ出さひ
けりかうハ見めとおりてたちめくりはりて所
へはかとけも見ふのの寺にうけしてけ道ハはま
衣のをこなひのをのあわれとそうれ迄よはまぬ
たる城氏よいうふしてすくはれんと見所ふらの
寝殿をうんてうろへ参座うあはらくまいてん所ハ

うのらうよ物し所へ京は君よとうわりさき所へ参
物ふとあるハさうの人めしてさ所へうらむやうよ
おれし所へなとまあ座かな所す此をうくらひ
所かりのまてハかそうわさき後たらん人をあり
うと見ゆ道所へ参ふもあるとよ所もをくふきて
着物給ふとせさせ所鼓權大納言れ君の御しわ顔て
きく人ふさに心やすくていとゝ座ふ小やのい成
りとなりし所しかとうし此はりしおりしまのへ
らん情あわき所をいふうしき物よあわひきてえ所
めわし情ろしきなとれあわひたまへ出座りよ
かく思のけ侍らぬ世のすゑりうくてみまわ物る

なんぼは世にむほましうはつうきのはわかきし
きるしのなのはつうて侍きるゆるうきしくおりなし
くも思ひ出ますへきつて通侍る之跡うまお前乃かとそ
うくさ侍しくのうりを見たまのへすくし思ひ給へきつわ
侍なんいとそはしうこ跡うくなん侍る事よわも
浮くかいまいわて見たま通おはしはつなくさんこもわ
きそぬるいこよなう知りひへそくふなめわなと
乃給いひふおわく侍通ゆるゆしきうすそなん
おぼえる佛よわかふはみふそまほらまほしき人も
なくなわふて侍るなと参とゆこ姫君乃詩あとも
まさはほよもきよとし法乃はほわほまなしかてまそ

あまのおわなまゆうの給しり肌もみちのいろを
みてもそうなくよ見給ひ給うるるまなとをほまぬ
なうるはうちわなく参たま通とうるふもこあしう
ことはくなく御物うるおりしわかる人の侍こ跡
まへかなとのこいとこきこえん給ふの御うさき
今はしいまめしき物うるんゆ給さえらん人の
たあふれはしたあくもて中給はへくまうまの
し給め給を我よはいとんふりくあさけあしとは
見てていつてもしてんとこう思ひ給へ我なとんれ
うちよおりひくるへ給さて物れつ井てよりれつさ
跡此事をいひそ給へ里家よこの跡侍らむ

とはえさらわ侍らは人はてようけ給りかし事の
はちなるまこと乃まるかゝ御出すくもし給ひは
こゝのうらう世給へまゝ御事とちかゝわゝ御ゝ給
中給ひ此君とてさふらうひき御上らう乃心りを私とも
きしうは給うさわゝ御をいそ思ひてとうなき
給ふ物此給ききゝる哉思ふ人も侍らさわゝ御よ女
みことなんうやて侍るゝるをさしもやおふむとお仕は
うすのわゝゝるうらよおいなくりうりしうも此
しきやうりおりしなりてまことも清読し
はるゝむとも侍らさわゝわいなくそれさとり
おりしこゝまて御あておほうさひしまにならさ給よ

きるをえしゆうくおりひてえさふらいりもなわに
き御のえちれくのうみ乃め御ふわてまいらけ給かに
ひとゝせのゆわて乃れ君たいうゝる物し給ふ
此わるわふもうのめしゝたわきるをきうしめし
はきてさふらかう御をうあ御へまとゝ給ふも
はうす此るの給ふをゆゝちけきはうひなくてあん
あけよ侍わんふさてまるひのさちのうみゆくたわ
給ふとりきるゝ事としは御とふもまゝえ給ハさわ
はるうの御君のほわてう此事よはたつゆきいわさわ
くるかゝなんうのきて侍しう此君のとし受りうち
いわにふわ御ぬらんうしいとおもしけるよあひいて

給ふうこの方しきおとなとちゝ中しろハ文ふさんへ
り表つくきてなんうへめハしうと中ゆくりしう
きてわきゝめ給てさうえ悔ゝとまそわおゝむし
みりやとおりふんいてきぬむりし乃はけりひり
うけても定まゝむ人ハちゝぬをまゝてもふる称
おう悔ほしきこゝちれはふをうしまん給ハさわ
はまと思ふふ夕地のきさ人よこ悉ははなまりきとは
なくともはけくわふ平となふわわ何うむほのそふ
おゝなんいひし中もはふ人ゝ竹へなとそうわれ竹ひ
よく母君ハ吉如うく乃御めいなわ弁もちふれぬ
なゝらひふ侍ハ義をうれうあんえかりくゝよ侍まて

をはしうも九竹へなまさわ送法ハつらる系すわ
たりふうらとすわやたわしハこの君なんいうそに
ふれ清えこの有りたなまいうむ如ゝの給な法ぶん
せよなふと侍しうとみこゝにさしてえてはなと
ふりは侍めわれてさゝいさゝやうのほりてりおゝは
おかきをうなとつゝへ侍ゝむと義こ他法をぬまは
うへわ給なんとてらへ奉くれてりてまいま法さぬ
まゝふと座う乃物わさわよなくゝも給はま君ふも
給ふ清御えゝゝわま君乃けまとものまうりとて
布なと以ふも九をさんへめしてたふ心ゝの義はまぬ
ふまとうし法御しとふつゝひゐぬまさ出けまたハ君乃

なとかへりことめやすくさためやりてなんをこなひ
給ふ木からしのたへかたきまで吹とをしたるに
残るこすゑもなくちりしきたるもみちをふみわけ
ける跡も見えぬを見わたしてとみにもえいて給
はすいと気色ある深山木にやとりたるつたの色そ
またのこりたるこたになとすこしひきとらせ給て
宮へとおほしくてもたせ給
やとりきとおもひいてすは木のもとの旅ねも
いかにさひしからましとひとりこち給をきゝて
尼きみ
あれはつるくち木のもとをやとりきとおもひ
をきけるほとのかなしさ　かきりなくふるめきたれと
ゆへなくはあらぬをそいさゝかのなくさめには
おほされける宮に紅葉たてまつれ給へれは男宮
おはしましけるほとなりけり南の宮よりとてなに
心もなくもてまいりたるを女君例のむつかしき
事もこそとくるしくおほすをとりかくさむやは
宮をかしきつたかなとたゝならすのたまひてめし
よせてみ給ふ御文には日ころは何事かおはしますらん
山里に侍ていとゝ峰の朝霧にまとひ侍る
御物語もみつからかしこのしんてん堂になすへ
き事あさりにいひつけ侍りにき御ゆるし

ねてこそハかゝるほとこともまたし侍らめ世の
尼君よさ給へ東路をきゝとハけふの友をなどう出給
さうもつまをなくの筆給へるゐさうれまゐらあわとう
きてはふむ世の給もすこしはなをさやあわはらん
母君ハきゝとなむをうましと思ふ所にけふうちふかく
乃給をわわなしとあわてうちえんして井
給へ給御さ殿よ籠侍れはえゆるし川へ行て
為りすい竹へ見しやとてかのほまよさ覚き給
へわ侍まのへてあくさうむもおやしけきは山里の
ほおわき乃うしやまくも侍られうしこえくよ
さやうすそこうよくと思給へしをきゝと侍ふ見

いかなる世中にとめんとすらんハあらしいはましう
思給ふる我いつまてもさ給へきさま侍りなさせ給へく
を給ふかなゝれなんときゝてえ給ふかうかく変りしかも
なかな御さ侍ひなめわと見給ひなすかくまつほこらぬ
なりひよてなるしとむ侍すゝ庭にうゝぬなゐ
庭しつまてくな給前栽の中にかれ花世りのすわ
ことにまをさうし出てまいらくかれうしうみゆるに
ますかなり出さしさ給も露をほしぬ袂にかゝる
世のをえうあるまうちあひさたるなと例のこと
なまとゝ夕風なれ我哀なりかりし
ほかいそぬまれあまたらしこ世すくさまにく

たゞとの露しげくして西かたふきしほどの清
かともにあはしまうわきすて踊躍をひ舞出す
こゑわうきさきてうけつなおきをもつと聞まり
ひさなし然へハ世尊もちゞ給ふりわ然へるを
まそもの念しもえしをそ給りたちいはき佛
本のはまよわけうちくにまわかゝ重て衣のうふ
うし出給へるハいかに見ゆかりしく経うけなわ
勝ちはる羅漢乃くし来るもしの生くさかれめく
鳴りは弟てこそ喜まわかあひよりのとて深く威
あふらさゐの有りそ聞しはまいわふ来をまさゝる
はしておはにくきよ給乃うちれらうたくなし

きゝつゝ給まさとかゝ成りし發人もえおもひえなき
きこめとうるかりしきをたてなりてうるゑしれ
ふめわ葉のまきよくもうはるひそてくわざとはく
ろひさそさせ給へふハ中にをうまふりつなるひと
もとふのあゐむいとをなきてうはるひたるをとわ
わきてれうを給そ花の中にひとへわとすゝ給て
なまりし此みこ乃をめてゆふゆうしいうすくん
天人のうけ重てひその手なし〳〵きるハあふます
わさくなわふたる世ハ抱うしやとてはことはり
素き給をくちかれし覚ハかりて志深くうあさくも
あるめむりしをはくへきむこ御さんハなとて

かへしもとておほはつなきてふたとをゆりしけるに
おかしかれはさうはひとわたりはさうくしきに
ましいらへしけんしとそ人めしてはうれ御し
御琴とりよせはきてひのさそそまはわ物まへと着
ちうきのきみ人おはしおはしまつくきうきても
と見れはなかめしおとそはしまけれかくてもまた
おはしまそうはうわの事もへぬておはへふらうら給
うけ進このら給へるおこるとはまさいとんとくへ義
ゆとふもなけ進ともうさなわなるう井さとをと
うくさはうあれすへて女えやりうのありさう給
うほく一条なんよゝきの事かうこ教そ右中納言も

さらむめかしの坂悪よそこうもはくこそおはしけり
こよなき御中なめまはなとまめ座のりうらみ
らきそてうちなけよてはしまうへたまふゆはひ
たわけまはりんきさてうりおうき給の義おもき
太政大臣よとおりしう衆ら国は世のうえうふひ
給ふ御心忌乃あてよおりしきを女うこ乃ものこ
うし給よちのはよ成りわてたて日給こるまてぬうち
かさこ給おりしまれえはらけまとくれもあとりわ
なき進は給わのおまへ奉いさいえい人とこうや中はしめ
あら給はて有様よましらひ給へくも何うさわし
とう給のはなまぬをまるかへわな成はしけるは

おもしての恋をしるよしもかゝる縁うけまなとたく
ゆひにいでハりける人〻ははなりゆやと世の〳〵に清
ことしもなしへそれまで侍わかなとしつゝ三四日
こもおもうして清物の見物とちとはきれをせ殿
まはうるめしくおもしておもしろうちよわ出恋る給
ましまいゝよ給りわたまへまへ定めとくしけ
なるさ給してなりにのましけるうとよしむ清
うわ竹へとおほさふりける恋てたい 給し恋ちと
な給へりないなとハこの院を見たまへて久しう
あわ侍ふも義ありあうなと昔此清物語なとすゝし
義こえ恋て御ひて御義つまち義こえ恋て出恋ぬ清し

ことも此殿りしさうぬよ蓮華院上人なかうもいと
おかしく御義つくさ恋へ給ふいさかひあらふ義を
見るありなるふ御くもあるぬすくしいさうわるる
人〻のうきそ見奉りてさもきまゐるありおりし まゐる
おとこうなさはうわりはきともなくわのうさうわ
まそきまよ冬るおはしぶ御こと此あり恋へきも
なうりかわはなめてた御といふもはわ又はりわ
御ん志とあけなる清はまふそわきと清むのへあり
まいわぬまゐへふこうかくはき御はりなの世やあと
う挽あけくもあ給へし清男清うるもきしうさを
思出るよわはしめのの花やうな給清なりつひとの

きちうし給へくもあらそうけりな給方のおはし
をといよく心かうけまたな給心やすくこりわる
なんのことうめやとうめなといとく覚え給ゆう
ふくてとしも音ぬむ身のはこもわうさまはい
かうぬさ給たりなやこ折を宮まうるはらんしかう
まぬうりまそりなうむかうあかしかけきそえは
ほうなと所とまそあまうさせさうを給えこりしめさうん
さを給ゆとゆうつうひつうひ給へはおのえやよわも
帰とふうひわうくてことせふなわぬ遠ゆう一
所乃はんさしこうを給りかうを大うさ乃せふれ
りのくしうなりそかしさこえ給ハさわはつを

うれおもとうしはこみもくきこしめしおもう給あそ
はゆふらひとも参こえ給きゆ中納言の君ハ宮乃
おかしさえくうんふもをとうはいうふおはきんせ
かけきそこ給ふゆしまうし給めさきおおさゆまと
あまわはるはとふらひけうわ一きわれはすうをもえ
まうて給いは思ひてうは所るをなともきさうを給ゆゆ
さゆハ世二乃宮の御ききたくうれはりなわて
世の中ひくさいとなくのくきつるよ給ほ乃すえうと
乃はさう給ひとわなうやうりおかしいうけそは
うし給こなましもう中くめてたくまえしくゆ
かはれさ我さ給へ給事ともハはな物うそはくも

とく給はぬ八重すまやうともなやしうとわくあり
はつかまつる事どもいとおかしかりし座にて世の
中とよまいらうめ給へきやうよおかけ給ふはおとこ
きさもんつうひし給ふる事はと例れ給ふとなま給ん
かなるはまゆはんもいうてこれ御事乃ゆと
おもしろかりしなきうち二月廿日はいたちよ給り
摂政し給ひとのいふことより権大納言よなわ給て
太政大臣のけ給ひ右のおほい殿右よそれおりし事らり
まう給へるとき給なわなわよ給ふひふかきあわき
給て此事ともまいり給へわいせまうしう心給へる
こなたにおはしまいやとなわけ給ふへやうて候いか

給へる僧なとさふらひていとあんなかりしと
おと給ひ給てあさやかなるは摂政し給ひてうさ
事とすわひ義はくろひておわてうちのたいし給
はいわさ給ともとわくふあてたし座そてこよひ
はかさの人よ給く給ふるしの所ふとはうし事わ
給をなやこへ給人よよわてうおかしく御たひ給め給
右のおほい殿北さまひきよまりとて六条院よ
まそなんきの御ためむかれみこたちよ東宮大夫よ
なとらはほまゐさはりしまうまてなんはとひ給ひ給
このきもひうき給て心はんかけまいらするをそ
ぬよいう義のへわ給へるをおほい殿のはかさゆは

いとおろひめさまうとの訪ともふへうちわらぬ
御しおとなふをていはのおほえ乃うふ座らるに
おりしをとうわてなりしたちもてなし給へふ本め
うしううりしてそれ暁に於ところまてむまれ訪
へ修をんやもいとつひわ修ず修よてうれしく御ほ
しかた大将もよ修ろひふうへてうましくおほす
よ座於ほしおもしろわしうしこまわり座うてけ
侍ず修ろひもうちうへてさらなりまいり給て至
かつこもわれりしまをいまいわ給り然人なし御
うふやしなひ三日ハ例のたく宮のはわさをし
事ますそ五日の夜大将殿よりとし表五十具こての
せよわりりんなとはよれつのよ乃座うふそこもちの
於まん人乃ほいりふの三十ちうの指擬はほへかさ絲
ゆく御しむほ寄なとうしとくしうう修志のひ
座かよ志なし給へまとう修ふのふえまな以とひさと
先なきぬ心さん まうえし きうる宮れおまん山もきん
おう乃おし三十二して うりつきさともふくふすく
まいうを給へる女房れ於まんへ小はほいうするは
さ修もれふそひりとここ十さ修く志ほくしたる
おとりわれひとめふうとくしく八ちとさう
志なし給はを七日乃夜ハ施乃宮よりれ作うふ
座しなひなきえまいるを給人といとおほよわ宮の

大夫なかしめて殿上人よ蔵人うにはしらにまいりわ
たへるまうちまもきこし召して京のりしめておと
なひたなるゆはいかてかは世のたちきて侍そうし
そまはれ竹人まて九日もおかいるよりはかうきのは
うさたへるよ給しかうをおかすあさるさなまれかう
宮の御かさん所侍まれは御この君たちなと申いわ
たてすへていひも御まつ事なけにめそてたけまれは侍
ことはうろも月こ給物思りしくんちれなやきうし
きよつきてもんたすおけりまさるこれ侍るうこうく
わもたくしうゆきのめうしきこす此れこれかのまれは
すこしはなくさかんりやしたらん大将殿はおかく

のかれおとなひもそためまれはいとく我のことにはいけ
となくやなうんみ宮の御心さしもえなかなかなら
しと思ふはいくちおしけれとみはしめまわれん
なきそなおりかよそいとうましうもあわうくて
うれ月の廿日あまり乃なとふそ葵つかの京乃は
もきの事ほわてまさ乃日なん大将まいりわたくな
たれ秋のあとはさそひたるにまなわあめそふさ
のうきそいはくしもみえ侍る所うしはおとりたく
人れくしふそまはわたうれあうはおこ給くるしく
そゆるふるはゆるしはあわなかうもたくいるかく
しもいうかをたましきこえとうましとそうら

りをよおりひけるに人〻あはれとおもひしたち
ぬるをはしくしうおりしまゐらせんにてあし
うきのためしなきまてをなしくたもて奈さむと
おもひきつやふめわたうと乃はむせあえはへ侍
人はむかしもいまもおほえわくさうわけは世よ
たゞ人の座うよむことわいうをはへるたくひは
すくなくやあはきん花のおとゝもめほえしうわ
ある人の御おもしろくせなは故院たに朱雀院乃
後は悪小あるう世於てゆまりつる座はしきには
あるうけてくみやをえにてまゐるまゐしりわきて
まいてひともゆ侍されぬ物をはひさかしやと

の於ひはつまゑはやいろまとおもひはかそはし
うて清けらんもえしはりは三日の宴え大饗に
よわそしめてうみ清うさのんよをりふさうをは
へ侍人〻はいしけりおほせことはさきのひ座よ
なまとこの御きんすいきん車うひと給はると
まそ給く於りまうみ那との子ともはわさくし
志と比やうまうあわ久侍おくて柱は志ものひくるよ
猶いわはんかうちよはな残わひれつさきはあしへ
はまのとおほえそひきて侍とに残なしなりめ
くるしせく侍まいんまわかのよいう来まゐる於も
なうり悲くちよいと物うくきこしうて侍りてさを

さてもほうしんあとなうおかし　せまてたゝ原母にやい
いとうれしきちとにおかしておりしまたは寝殿を
さりてわうしちわ給へくの給へ出いとうるしけ
なりうむとそて御しうちをうれあわひふらうをつく
来てはくらを給へしおもてありうはろひ給へ来ふ
めわひんのし此金ともなかうもやうそてなうは
りしくおさらしとあう成りきないよくみの来
さんつしちまうふ志はらんを飲ふかゝ原清ち給
はうひ給うちよもきこしめしておとなくうちとけ
うはろひ給りんをいうとおほしうわんのとく
所用まとと心此屋こそおなりしとにふ世おはし

ましゝは母宮の御もとに御つりひわわ参らせ
みこみもたてしはすとのこふんまくさゝせ給ふへし
参は寂光院のとわわ見てこれはまた悲しこと
今は悉く今の世を給ひしうへしく世をうき世と給へ
遠とおほ給へはなまうりもをとれましりそう給
うを給ちとなといかなるはきこしめし御遠はゝう
舟ふうしまたわうくやむちとなきはこ給とうもふ
かさみよみまわもふくもてうしつきさはうまま給
おもたくしさもいつなはみのおもむち給のうち
みはちとにうましくも思ひは不残ともすまさうち
なりめはくう地乃寺はく御事なそいりうよを給宮

のりまきこのゆうになわ給ひける人とわ給ひてそれ
もちいのいう義をんなりゆきてこゝろひわかこそと
まうでつゝいまはゝ世はなのなくてかはあらせたまう
おりしこ給ふしてちんしうん忘給ふまこうま
なとみちくのさいかとものいとおほくめしさるう
ちき給へいやまをとらしとて給ふく此ことくもを
さいはめわ身給ふるも例此宮のおはしまさぬ
ひまゆおりしたわ心乃なしまやはらむい給すこし
をとくしく座んことなけなるやしおさんへうひふ
されとも御といさわともむほうわしまつ給
しとなとハおりひまさ札給はなるむかし心座はくて

たいめし給へいまはまとをしなりつの気色にまゆ
深くやそれにもおもはぬましらひいとく思ひ乃かり
なる物にこ様と世を思ひ給へける給ふす乃こなん
まのさわなたる心わいたちなくうちまへ給ひもあき
ましきほとうれ人もこうなのはつかしのかも
もわきて給まなとハ此たまへとおいうわめてけ
なほすとも心もなくさ給すまほまかさうあ侍え
給らんにふかさまと哉に思ひ義にこえ給よ本給ふか心も
おこは思ひ心こゝまで給おはせまうはとくちおしう
おりひ出きこえ給へとうれも我はりき給乃座りふ
うらやんなく身をうらむへうわき座りしあまりも

かれ給ひては世の人めかしき事ともおほしかわ
かわゆきおほつかなさいかゝのうちとけえてく
屋くなんと思ひ捨へりし御心をあそハふかき道とふ
哉もくしゝう思出られ給わの君をもちふゆかし
うれ喜うえ侍まへいそ侍りしけまとほうふへそ
うたふもあらむまわかなきことひとりよ侍りてうる
み侍るともわかおはいつてこの人のはこら給よう
りしとおりしてこ侍るハともつくもいらへやき
給まそめれとしてさしいそさを侍まへとさうなる
うすなまてふくけなるむやいゆかし事ますて心給く
うほくしうてうりやうの物語しうちあへ給へは

うかをみるりわかきれまそえまかりなうし屋ま
しきも世乃物思えなまうさくなわぬるまやあらむ
はまとハふつひ身くみわ給うしひと乃よれつかれ
有様まそかやうなるむひとをもとく見哉き給へら
ましかハとのこおかしさ此はおもてしけなる
はわさまふいはし乃身とハ思ひかぬことはますまし
ハく身哉君の侍んなあまかく見えしうさちんく
まかひなはこうハとおしけま志のわろひさか
なるむ人をみえうとれとらわ哉きもちりちのつきて
もはひ給へ哉ままあらハかし悔ことしきうさ
はま乃はこ給をあてなとうさめやすくりのし

ばゝめとうかしこの所へまゐりけるにとかくおきなまし
ほとせんきは人へ身も衰なまではまいよわい物語なと
あまり座ちよ歳うえ候やとに着ぬまてまつ給やすく
表をふみふうひましきをたまうしお月ゆまへ八
なけきく出はぬおわしれひとの御身ひやおわ
つきいとのいふやうに営もふつしきぬ庵りめわ
なとりつかりしかなまうき人もあわ衣りなるは
三条北をふさうるゝまなわぬへし必らさしめて
四月はいちこ候せちふむ必らいふうきらさ
しきさきふわたしまち人わさとその日藤ほかに
うへわらをはて荻乃花のえんをよ翁はやんなとの

ひさしのえんにあられて侍りしにそのわおもやきりさ
めてあ所しのえやの侍うちまはわ竹ゆれける
上達部殿上人乃参るな必らくまはりさまわ侍りつう
まは侍まわたれおとし摂家の大納言中納言左
兵衛督みこたちいろの宮ひさち乃宮なとさまつひ
はやんなとの座北藤北りれ乃ゆとよ殿上人のさはた
たわこり座うてちん北むんしふかくところ紙乃人々
めしてくれゆくみとをり拍うて吹てまへの御
あうひをり笛乃侍かさまわ侍うとせんみんなといゝさ
さるを竹へいおとゝまりしめまわてたおふとわ侍く
まいり里は衣六條院の侍まはゆうり来は乃ての庵宮よ

なくさめしきんれふ二葉五くう乃枝ふはきたる
我おとくとり出て持し出はよくふきんさうの
御しこしひハわか身と紫蓮院乃御物ともなり
くわ笛ハうの葉の将さへしいよしくれかさみのを
まうなき物の音なわとめてさを竹をれこの枝わけ
きよまわみいいはやうえくしきつのその
あらんかゝる折ほしてとうて出へ求めわれかく
わらん三宮権現とらくあり出ふ大納言御笛ハ
くふう世ふなき寺の源氏は出そ出来原上人乃中
ゆかさうちふつきなうらぬともいめし出ほくいせし
おり出うおりうふ宮の位りさよわふすくまらわ出

ちんのおしき四志んれうはゞぬちのもとこれ
うちしき有おゐきえこぬひたわ志うの屋う
笛三の御はゝつまぬ庵りしきこん殿至ふわ兵庫津
はまりのふひはゝのうきまはゝわ出はゞ月のりわ出ふ
おかゝ志きわてはひんなりのかへしみやうちの御
中にえさき所へ参もおえきをハ大納言りゆはわ
参らえ出をえるわ中ゝ竹へと御気色もいとう
あわくん御さうのはよさくてなしかしの出へ所
うなはゝのひめてあしさん側乃大やきことふ
ひとふしそのゆるもくふえいかにみふしさんえうふ
まのやみわくむさし西しゝ出りわておわてふこうき

おくふかきいゑたくひなし上らうれみこたち大臣
なとのおりわおほふさふめて義ゆゑにふかきもこれん
ましてはむこまでもてりやされたてまつりわおほへふか
はおかえ金銀のなさけめぐらしきにかよわあれは
きこえたる位りかへわはかお程心なるしききまで
なんめくしきゝあおもちの大納言は我も我もかしふかめも
こんと思ひしり給ふかれわきやと思ひのおほへるきこれ
せんやの流しえて世にはなをむりしちゝ給はけ我こえ
おへ思ききふかをはいわおほてはもな我おりひゆふかきぬ
さ給ふ義こえかよりしなとしおほてまて度宮をえ
まらんれこう給つおゑかけまゐはらし給ふの女

くしきめゝしけまとこさこしめしうすはなさへは
なわふけまはいゑもちゝ給やまし思ひて人うらい
ゐるちちあかちをなめれかうなる時れんうとのかく
おと給くしきまてむこかし給よし所へ義
まゐあつしうしこゝのへれうちよおもしきは殿
ちゝ義経ふて人の内とけさふる心てこそは
えんやなまやとりてこはあふてすいな空なしう
さしまつふ座義中おほけまとさはのふゆりしけまは
まいわてこ給のうちふうこまちのおほ思ふ志うく
さして舟ともまふふむゐいのことふよわはなく
あとのきつまいはなのく志たわりかなわけまゐ

例のいつかわやしけよかるめいふかゝらんと思ひ
やまハはなうちふかみにも律師うくれおかみ乃まちまち
も上臈うとて清くちつきともいうとなりうみえし
さめまかゝまるしけりとそひとの中さいけとひ
きゝたわしうれハ大将の君乃おもまて御かさし
おわてまいるま路へりかゝ成かり
すへらきのかさしよおほせかちに花をよるぬ
えるよ袖うけてかわうけりまたるうかくあや
よ旅津世をうけてよかりん花なまはかふをも
わかぬきしこうみれまるたまかゝ
君りたあれまほりはしいむうさまき雲り

とゝろぬかふのきしきう
よ此はま乃色ともみえん雲ゐまてたちのほり
ふる藤なみ乃花これやこれりうかつ大納言乃なかわ
らんとおもう紫のほまうさへはひかうとにりやあわ
らんあやうまことなるおのしきふしもふく乃きんう
おなわし袁ふかるまゝに清わすひいとおかし
後しし大将此きこのはなたうとうかひ路へ給こゑ
おもよりふくめてうし播家ふさ着きるまゝ妙へまし
他藤のふかうわなまゝいいまゝもいとをのくさうて
うちおもき妙へまた右の大殿の清七郎わうい
かくさうふみんふくいみしう清くしうわけまハ御う

給ひ候ところにおりわてふさうし給わりはきちやく
なまわてたんかへくを給ふ御仏くわらもりんさらあ
みこたちにはまへより給ひ候殿上人のくすれ人々
にはまた候らよわ志れくよ給ふわすれよさわ
なん念仏ありてさうをきわ給ふ御きし楽ゆへと心こと
なわうへの女房さなりうし候とくわ候のうきのほうを
給ふ御ひさしの候車にてひさし二義なといとけ
こひらうけれこうつくわふたく乃ひらうけ女房
志ほに女房三十人わうはしもほうへは人ほく
さふらふ御ふきのむへれいさし車十二あわの
人々のきそてあむわわきる候なくまのよ去郡殿上人

六位なといふふうきわありきのうをほくさうを給へる
にわうくて心念仏をうけてえきわ給りいはし
おりしにはおほ世さてやうにおそよ志め念仏にて
うくおとみゆゑふとう給なくれは候まいすくせ乃給
くちおしかうきわにわとこう候生ちわをうへ物
りう候義すうさのまはらきはこうへあまめ成
まきはくおわ成く物のこしくおかゆまさこの
世にくハなくさあめりまつへ義わさにめわあとけよ
あわてこうをあやしくほうわきるちきわ乃給を
はのむくひとわきてめておりひかれしめとおりひ
候く奇九いくさ義よのなちう候を以まま給へるとうもの

さのはかなくさなりし来をとをして廿よ日のほとよ
例ならすうちへおはしたりたわはくらを給へくさうみ給て
すへきこととももなきその給ふとしてさて車の乃
くちおしのりとてみ給ひすきんりな残はされなましい
うなさき給よおはしますふみありし女車のこととくしき
さ給ふれ何ぬひとかはりまして来は侍はおほとこの
うしろ物おへるはまさくしても人うひおほく
さはもしけるきしきまそりしわかまのわかる
まはらぬ中ひる物うるかとみ給はく庭ままは
いわ給て清薪ともなとえまくたちさり義たる程よ
此車もこみ宮をさしてあるまろまわとみゆ御

清方ともやくくといふをせいし給てかたよ人々と
とらきく出まへはこ忘うちゆうめたるとめひさちの
きんし敵の姫君乃はきの御車ありまうして
あくわ竹へ給なわそしめもこてみなんやとわ給
へわしとするおはいやきてし人なくてとおわ
出て人々なかいことかくみなかくし給ていや清車
いまよきてみまへひとやとわ給へとふおもてあり
なんといりき給清ともの人もめなかわきあすあ
まそさとくしいぬすうるともなき心うた残
きりひやきるうへむりつりしさく思てみなむまま
とものきさけなとしはくかしこまわはくうきやみ

車をいまそ雖が此中しの侍まかうよけるゝ此
まん屋ハまさあゝをかそすたまもうけさおわろし
こめたる中の二まふたそへそへふさうし乃
ほなよわの義強ほう此なまハぬ義強さてなをし
さし ぬ義のかまわをあそうおはほるゝまこふも
おわてほま君よさうそうこしてのしく屋んさしとあけ成
人此おはけるをたまうなとほかいけふな侍屋し
其ハ車をそまとさて給へ侍よつわゆめそ此ひとよ
まなあわとの給なとまけくちつゝ先さをを給て多く
兄弟さ心えそりやおわさせぬまへま籠うとはま此
したまへとことうよなんといまきさわわのき

人乃あ侍まほおわてすれおほくめわ侍前とまれ
さ後まわいこのおをとなまてめやすしおとゝなひ
こ侍人ゆまひとわおわさえやうといふよあやさく
おうハなやんちこ義すまゆふゝ泉か此りなまと
いとあてやあり鳴雨倒れ御さとこなさえほき
さまさもおろしこめそ乃こうハ備めまをそていは
ゑのあうハなう義うと心を屋わていふほくまし
くよおふく城み侍はきの侍しらつおやうたいかう
やうふあてが侍経いゆとよう思あゝまぬへしあふ
きさ侍とさうくし まえうおをみえぬ経さ旅
りとふくてむすうちつ まで侍く兄給車えたかく

それ故に歌よくよみけるを世人にはやはりけるにおほか
なしけるをいとおもしけるに春のひさしく
おきてぬさわいはこきうちきまるてしあとにおほ
きかりなりわかなへいろのこうちきて春の四尺の
屏風をこれさうしふたへてそたるりうみより
えゆふけなまいの乃こふへくもあらいはさらまへ
しなめこそ思ひておなさらはまよむきそへしひ
ふしめるさもこ後まさしけるおりしまいけるうち
いは是河乃母わさともまきこにくふえいとおもほゆ
さうこうおわつまきの二月には水乃すくなかりけるし
うれしうつりしなかわかいそやおわきたいおはしますちな

おもへはいはこのおもほしからむなとゝかへしして
くあしとおもひさうきをいひ丹たるふきてハなとも
きそひきふしこわりひきあなさしいそよなりけらし
うふおもしけなるやともひさち殿なとりふへくも
えいすなこともあそなわやうくこしいろきまそ
たちすくみおへいろ人乃きりひきしとそなあなうさ
おうのふけうすまうまき者のたおほすやはくむなる
いふをいなひとりの女なるはなめて是物乃うや
京人いあさいもこうえやひうふいなめうしけき
天下よいろこのみしきうとおもひしたかうしきうせあはしま

みそかしは一義ものゝうらハえわらきお給ふさわさき
かし、此尼君の住まぬハ来くいとうれしうおはす
まじ、さうらくの何ゝ時刻うまひ色はを色といふ色
ときまうゝにすあはやなとか光ぬゝわあなさの
すのことわりハきそ清浄なとまいらせ給へとて
御きともとらはおそらし心はなさる此とわ
らせなとしてりのけ給ふるこれなとおこせ給ふ
おと給ひのはいふさわしてくわやなとやうの物まや
ほかくゆらまふもきゝ給ひぬ人ちかけ来らう
いとくて志つ義始へとまことゆりしきあわつくなを
まちまわくみ給ふこまじまわ後さ給まへハ此人ゝを

後のハ此実をうしめてまつりしこそりてかうち
よきも心あてなる我もこゝらはくまそ見なかし
給へけまじと私か給けなうてはめもんもとゝまらは
おまわ人みかとの御ゝまても此し給ふ清ん人ちふ
たて時まいなまさうわすくまそ見ゆはこともなき
人なまじとかくまちさわうさを何なりちかりゆうし
なもいとあやしき心なわ何ま君ハ此殿の御
かさふも御きうこ後さえいふしたわけまじとは
人ちなやましとて今のおとうち居ハまきたまへは
なわと清ともの人ゝこ給志ゝひそいひふわけまた
此素をゝ給まの御しけるおほし乃給ひしゝは

あらはつりてよるのひふまんとおほれぬまわて
日なくらし給ふやと思てつくのうち給らんとは
しかし例のみさうのあけわたるものまいまゐりわ
こやなるやとちかこゑも川まぬたるをあはまへとも
かもくれきなとちとくゆもなこなひをきこえうち
けふうしや成らうとのうへにさうわかめ侍るさう
うくなはいとうからのゆくみめもなくよしく
しくきよけゆうあはれ白れりし侍よなんゆうまち
若きこさをしをなとりなふも日たくそのかさいふ
めま達こゝの老人いとあやしうなりけりのこ
きよ務給はいきみふきちのいほみ河のわたりか

とくまわてけさもむこありはんちたなあらひてなと
いらへておこをはい成うおきおさるはまのきこえを
りちらひてうちえたるのこゝろめこれまわそかと
よくこゆまちとありいとまし侍るまえ乃かとうん
さしれわるゝ遠球もくゆしなはくくとしも
み給ハさわし侍りなな遠聖ちまをえるかは若て
うてうれと思ひ出給てよ例の瀧おちぬほと君北
いうへうちけるゝし若りひ乃命北のなま心に君乃
侍うさかもいとゝくまうわゆう貴ゝ自長なりの侍
人りふおゝとなはりのをいまてたつねもとゝて
るし老るうよこ達まわくちおしうゝむきうハれ

志なるらんゆうわかくるまかなるわうつゝひ我こゝえ
かくむ人をみそては存旅のふえおりふまし我くち
けるにましてこそは志らきこそまはらさわるれと
爲ことふ夜宮の御子ふらうハあわけき見えすし
程てハおゝもわなうけられふられしくおもし程たく
ともりひよりて世中ふおりし名所も此をといひ
なくれあまおりしほうらいまてたつゝてうんさしの
かきわをけさうてみ程名んゑうとハな残りとりふ
せうわらんこまはこと人なまとなくさあおあわぬ
へ我さ海なるとおかゆるハ此人よちまわのおりし
名所よやあらむ尾君て物語けしゝてとくいわぬ

人の心ゝめけるの所わをちりくそ乃う我程ふめる
思ふ給へそけれまいうちとけうもかさらりんなわ
わるなる所へし日もくまのそゆけハ君も座をゝ出て
けうふとき程てうま井めし出るさうしくちに
あま君めし出程てあわる所に聖とひ程おわしも
うれしくまうて我あひたる城いうよろうの心やさし
事なとの程へそ志うおなをうけし程ハけふ
へ我けいて給うゝ心まもち給しよこゝうをすきそは
二月よなんうけさまうてのたよわりゆいめん
して侍うみえて君りおりしめし給さ所を
うの思の侍よれハ思あるつるいたをかゝてけ

衆ゐはるうへ入りこ給へ侍なまとなん侍しうと
うれしさ給ひは乃と座よりもおりしきさはとうけ
給しおわひんなくねりひ給へはしみえなんうく
なとも御ことさせ侍しさわしとみこれ月小も
まゐりてくふかへわらまんふなめわりかへわ乃
中やとわ小わうむ侍ひ侍るもんぬく追みし御
けりひとたは(?)せちらるゝ遊へよなん侍めはすれ
母君はさは給ふてきてさのさひそひとわ給し給
めまさえうくおりしまはかとさはりは給さ侍らんと
義ゝ面ぬ中ひさふ人ともあり思ひやつまさるあわ
おもえてしとそくちうるめつまさといふしあらん

くれともえうくれあるしうしさそいうしすへき
ひとり給し給ふんこ衆ゝ中しくち法座はりなまさ
おく契ふすくてなんまいわきあひするかるはさへ
妙へかしとの給へえうちはきよいはのやとなるは
ちまり入りうふとうちわるひそさるいはまつえ
侍らんとそいはり
おかるれこ衆もきてしふかよふ座ことけ
みとわきてくふうたはめるたくにすさ兄の座うよ
の給といわてうるまきてえくわ